

社団法人 日本図書館協会 図書館学校教育部会

# 会 報 第 74 号

2005 (平成17) 年11月20日発行 編集・発行 図書館学教育部会

## 目次

|   |    |
|---|----|
| 2005 年度第 1 回研究集会報告 (4 月 30 日 於: 日本図書館協会会館)    |    |
| 「引き出し 育て 生かす」授業の試み (山田茂雄) .....               | 1  |
| 亜細亜大学図書館学課程「図書館特論」の授業実践 (安形 輝) .....          | 3  |
| 学習・教育支援を担当する図書館員の養成プログラム (長澤多代) .....         | 6  |
| 技術ではなく志を育てる職員研修 (米澤 誠) .....                  | 9  |
| パネルディスカッション .....                             | 12 |
| アンケートに見る集会の成果 .....                           | 31 |
| 2005 年度第 2 回研究集会のご案内 (12 月 17 日 於: 新大阪) ..... | 32 |

日本図書館協会図書館学教育部会 2005 年度第 1 回研究集会報告

## 図書館の業務モデルと教育モデル (4)

—— 利用者の観点からの教育モデルの再構築 ——

2005 年度第 1 回の研究集会は、部会総会を併せて、4 月 30 日に日本図書館協会会館で開催されました。ゴールデン・ウィークのさなかにかかわらず 44 名もの参加がありました。今回の特徴は、図書館現場の皆さまが集まり、しかも積極的な発言が相次いだことでしょう。サブタイトルとして「利用者の観点からの教育モデルの再構築」に期待が寄せられたものと考えられます。基調講演・3 件の事例報告もさることながら、シンポジウムでの発言に注目していただきたいと思います。

### 基調講演

## 「引き出し 育て 生かす」授業の試み

山 田 茂 雄 (鶴見大学文学部日本文学科)

### はじめに

私は 5 年前まで小・中学校及び教育行政併せて 36 年間教職の仕事に就いてきました。現在教職課程を担当する者として大学での授業はどうあるべきかを模索しています。本校では大学 4 年次に教育実習を実施する関係から 3 年次までに中学校や高等学校で教育実習するための基本的な指導方法を取り入れて授業を展開し

ています。教育は「一人一人の潜在的な能力を引き出し、育て、生かす」ことだと考えています。基本的には、学生が受け身でなく主体的に授業に参加できる工夫を試みています。

つたない実践ではありますが事例を報告させていただきます。

**事例1** 1年次の「教育原理」の授業では、教育の目標と絡めて、本校では誰も教えない「鶴見大学校歌」を指導します。4年間で学んで自校の校歌が歌えない、こんな寂しいことはありません。特に、歌詞の中に大学の理念「大覚円成 報恩行持」が歌われていますので、歌詞の解釈をしながら歌唱指導します。180名の学生が一同に歌う姿は壮観です。校歌を通して学生とのコミュニケーションを図っています。(資料 鶴見大学校歌)

**事例2** 3年次の「教師論」の授業では、まずアンケートを取ります。(1) そのアンケートは「現在の教育問題で関心があること」「自分が受けてきた教育に関して疑問や更に詳しく知りたいこと」を、1内容を1枚のポストイットに一人3点書かせ提出させます。例「ゆとりの教育と学力低下」「教員の資質低下」「問題行動の中学生の生徒指導」(2) 次に、7～8名のグループに分かれて話し合いをしながらポストイットに書かれた内容を内容別にA3判1枚に貼付しながら整理します。(KJ法の手法を用います。)ここで大切なことは、自分が書いた内容を他のグループ構成員に理解してもらうことです。(3) 次の授業までに、教師が5～6グループの作成したまとめを数値を入れてクラス全体のアンケート結果として内容別に一覧にしてA4判にプリントします。と同時にクラス全体のポストイットの集約結果を模造紙に貼付します。(4) 模造紙に集約された内容別ポストイットを見ながら、A4判にまとめられた「教育課題一覧」の内容項目について授業で教師が説明したり解釈したり、ある時は学生になぜ疑問を感じているのか、知りたいのか、また自分の考えを発表させながら授業を進めていきます。また、学生からあげられなかった重要事項(例「学力の捉え方」「児童虐待」「チーム・ティーチング」)については、教師の方で新たに加えて授業内容とします。現在の教育課題を浮き彫りにして授業が展開されます。(資料 模造紙にまとめられた教育課題一覧とA4判にまとめられた内容項目一覧)

**事例3** 「教師論」その2の授業として、数週間の新聞記事やインターネットから、教員の法令違反に関する記事を収集させ、その内容は何という法令違反となりどのような罰則があるかについて検証します。公務員の厳しさと服務規程について授業が展開されます。(資料 新聞切り抜き、インターネット記事)

**事例4** 3年次の「教育実習」の授業では、毎時間の始めに数人ずつ「2分間自己紹介」を実施しています。

(1) 日本文学科、文化財学科の学生は、自分の専門を生かす小道具を使用することを勧めています。例えば、日本文学科では愛読書の紹介や書道を見せるとか、文化財学科では土器や漆で塗った作品を見せるとか、英語英米学科では英会話を取り入れることを義務づけています。(2) 終了後は全員で評価基準を設けてA～Cの3段階で相互評価をし教師が総評を行っています。Cが複数ついた場合には再度行うことになっています。

**事例5** 3年次の「教育実習」その2の授業では、先輩の教育実習で実施した指導案を使ってアナリゼ(授業分析)を実施します。(1) 先輩の指導案を印刷し、5～6名のグループに分かれ、授業で使用した教材を研究します。(2) 次に、この指導案の長所・短所を話し合いながらグループとしてのまとめをします。また、自分が授業をするとしたらどうするかを話し合い、指導案の修正をします。(3) グループごとのまとめを代表者が全体に発表します。この授業では、教材研究の仕方を学ぶとともに、指導案の作成の仕方を学びます。(資料先輩の指導案)

**事例6** 3年次の「教育実習」その3の授業では、教科の年間指導計画のA校とB校の比較をグループごとに検討し、それぞれの学校の特徴が教師主体か生徒主体の年間指導計画かを明らかにさせます。この授業では、年間指導計画の基本的な作成の仕方を学びます。(資料 A校とB校の年間指導計画)

**事例7** 2年次の「道徳教育」の授業では、道徳学習指導案を作成させ、代表による模擬授業を実施します。(1) 読み物資料、オリンピック開催年にはオリンピック新聞記事、インターネット等から資料を選択させ、道徳学習指導案を一人一人が作成し、作成過程で教師の個別指導を受けます。(2) 2～3時間かけて作成された道徳学習指導案の中から、代表的なものを抽出し模擬授業を実施します。(3) 授業者以外は生徒となります。また、模擬授業終了後は、教師の立場になり全員で評価基準を設けてA～Cの3段階で相互評価を行います。(4) 最後は、教師が目標の立て方、指導観、生徒観、指導過程について総評を行います。この授業では、道徳学習指導案の作成の仕方や資料選択のポイント等を学びます。

**事例8** 2年次の「特別活動」の授業では、魅力ある望ましい修学旅行を立案させます。(1) 小中高時代の経験から、魅力ある斬新的な修学旅行を立案させます。(2) 作成の過程で教師は個別指導を行います。

(3) 完成したところでグループに分かれ、互いに自分の立案した修学旅行案を紹介し合います。(4) 評価基準を設けて(斬新性、経済性、安全性、学習性等) A～Cの3段階で相互評価を行います。(5) 評価が高かった代表者は全体の場で発表します。この授業では、修学旅行については各学校がいろいろな観点に気配りをしながら創意工夫して計画立案し実施していることに気づかせるようにしています。(資料 魅力ある修学旅行の立案例)

#### おわりに

1 「引き出し、育て、生かす」授業は、常に学生が受け身の授業でなく、授業の主役になることが大切であると考えます。勿論大学で初めて学ぶことも沢山あ

るわけですから教師が指導する「育て」の部分が多くを占めるのは当然のことです。

2 また、一斉学習だけでなく、グループ学習や個別学習など学習形態を工夫することも大切なことです。特に、グループ学習による討議は一人一人の特性を生かしながら指導理念を確立させていく上で効果的です。更に、個別学習は教師と学生とのコミュニケーションを豊かにさせるために効果的ですが、時間的に十分確保することができないことが悩みの種です。

3 教育実習に参加した学生の実習記録から実習校の指導教員のアドバイスを分析し、大学の授業では何を指導しておくことが大切かを汲み取ることを心がけています。

### 【事例報告1】

## 亜細亜大学図書館学課程「図書館特論」の授業実践

安 形 輝 (亜細亜大学)

#### 1. はじめに

今回の報告では、私が亜細亜大学で担当している「図書館特論」の授業実践について紹介する。

最初に亜細亜大学図書館学課程の状況について簡単に説明しておく。亜細亜大学は、図書館学課程を持つ大学であり、図書館・情報学に関して、専門の大学院、専門の学部、専門の学科を持つ大学とは性格が異なる。専門課程のオプションとして司書資格取得のための図書館学課程が設置されており、単位数をあまり増やすことはできないため、充実した図書館学教育を行うには制約が多い環境と言える。

亜細亜大学で図書館学課程に関わる専任教員は長田秀一教授と私の2人である。図書館学課程の受講者は各学年30人弱であり、大学全体の学生数が各学年1,500人前後であることから、概ね50人に1人が図書館学課程を受講していると言える。課程受講開始時に課程受講料を30,000円徴収しており、結果として、大学のなかでもとりわけ意欲のある真面目な学生が多くなっている。

図書館学課程のみを持つ大学は多いが、それらの大学と比較し亜細亜大学独自の特徴を敢えてあげれば、最大規模の夏期司書講習を行っていることである。夏期講習は160人の定員に500人以上が応募し競争率

が高いためか、優秀かつ積極的な受講生が多い。夏期講習時にそのような積極的な受講生を相手にすると、教員としては、大学生の図書館学課程履修者の積極性のなさを痛切に感じている。

私の亜細亜大学図書館学課程履修者の印象は、真面目で素直であるが、一方で、積極性に欠け、自己表現が苦手である、というものである。そこで、そのような学生が受け身ではなく自ら積極的に学習する図書館学の授業を用意したいと考えた。しかし、図書館学課程の多くの科目では授業内容が詳細に決められており、その枠内では工夫を行うのが困難であった。ただ、司書科目のなかで「図書館特論」はかなり自由度が高い授業である。そこで、「図書館特論」の授業において、学生たちそれぞれがテーマの選択を行うところから始め、最終的にプレゼンテーションを行う、という形式のなかで、積極性、自己表現能力を少しでも身につけてもらうことを考えた。

この授業を担当するにあたり、事前に他の大学での授業内容についても調べたが、各大学での「図書館特論」は本当にさまざまであった。ただ、私が最初に調べた時点では「図書館特論」で発表形式の授業を行う大学はあまりなかったように記憶している。今回の報告にあたり、改めて他大学がどのような「図書館特論」

を実施しているかをGoogleで調べたところ、検索結果の1位は「ホームページ作成」(関西外国語大学)、2位は「図書館実習」(明治大学)、3位は「図書館の機械化と図書館施設と設備についての講義」(東海大学)であった。検索結果の下位もみると「図書館特論」内で図書館実習に対する事前研修を行っている大学が多いようである。

## 2. 亜細亜大学の図書館特論の概要

前述のように亜細亜大学の「図書館特論」はあるトピックについて調査し、その結果をプレゼンテーションにまとめ発表を行う形式の授業を行っている。発表するトピックは、全体テーマとした「電子図書館あるいは資料の電子化」に関わる範囲で、学生が興味あるものを自由に設定するものとした。全体テーマを限定した理由は、トピック設定の手がかりを少しでも与えるためである。実際、授業の趣旨からは、図書館学に関連しさえすればどんなトピックでも構わないが、それでは学生の多くがどこから手をつけてよいか戸惑ってしまうと予想されるため、全体テーマを限定した。この限定の仕方であれば、図書館に関わる現代的な課題の多くと関連付けることができる。

履修人数は毎年5人前後であり、今年度は4人であった。履修人数が少ないのは、選択必須のもう一つの選択肢である「図書・図書館史」と競合するためである。「図書館特論」が3年次から履修可能であるのに対し、「図書・図書館史」は2年次から履修可能であるため、多くの学生が2年次に「図書・図書館史」を履修してしまう。ただし、この少人数のおかげで、学生の進捗に応じた対応を取ることができている。履修人数が多かった年は2~3名でグループを作成し発表を行ってきた。

授業構成は、授業回数を13回程度と想定し、調査発表を行うための授業項目を配置し、必要に応じ補足的な講義や演習を入れている。授業項目としては①ガイダンス、②トピック設定、③文献調査とプレゼンテーション作成、④中間発表、⑤追加的な調査と改善、⑥最終発表とし、各項目を1~3回の授業で実施している。

ここで、各項目について簡単に説明しておく。①ガイダンスでは授業の概要を説明する。②トピック設定では「電子図書館」「資料の電子化」などのキーワードで広くデータベースや図書館を使い文献を探索し、自分の興味あるトピックを教員や他の履修生と相談し

ながら絞りこんでいく。例えば、今年度の学生は「障害者を対象とした資料の電子化」といったトピックを設定している。③文献調査では学生が「情報検索演習」の経験を基に検索を行い、代表的な文献の要約を作成し授業内で紹介する。また、③のプレゼンテーション作成では、学生が調査結果をプレゼンテーションにまとめる、PowerPointファイルはお互いの参考とするため後述のWikiで共有する。普通ならば、教員がPowerPointの使い方を教えるが、使い方は他の必修授業で扱っているため、ここではプレゼンテーションの全体的な注意を簡単に行う程度である。④中間発表では最初の発表を行い、発表者自身も含めお互いに評価する。⑤追加的な調査と改善では中間発表の結果に基づいて必要と思われる調査をさらに行うとともにプレゼンテーションの改善を行う。⑥最終発表では最後の発表を行い、相互評価を行う。教員は、その結果に基づき最終評価を行う。

「図書館特論」の構造的な問題として、①前述の履修人数が少ないこと、②就職活動との競合、③教育実習との競合がある。どれもこの科目が3年次から履修可能であることに由来する問題である。そのため、開講年次を下げる対策が考えられるが、数年前に履修可能年次を4年次から3年次に引き下げたばかりであり、さらなる引き下げは判断が難しい(2年次は図書館学課程履修の初年度である)。

また、「図書館特論」の授業としての課題は、理想と現実のギャップにある。理想は、発表しお互いに議論を戦わせる段階まで行くことであるが、実際には発表し(ローテーションで)質問するところまでしか実現できていない。

このように課題は多くある「図書館特論」であるが、積極的に調査を行い、こちらの予想以上に充実したプレゼンテーションを行う学生もいる。そのような発表を見るたびに、このレベルの発表を少しでも多くしたいと考えてきた。そして、その実現のために、毎年、何らかの工夫を行ってきた。

## 3. 今年度の新たな工夫

今年度の新たな工夫としては、3つの新機軸を導入している。

### 3.1 Wikiを用いた情報共有

新機軸の一つ目は授業資料配付と意見交換のためのWikiの導入である。Wikiとは「ウェブブラウザを利用してWWWサーバ上のハイパーテキスト文書を書

き換えるシステムの一つ」である（この定義は、それ自身がWikiで運営されている民主的な百科事典であるWikipedia <http://ja.wikipedia.org/>の項目「Wiki」から抜粋したものである）。他の言葉で言い換えれば、自由に書き換え可能なCMS（コンテンツマネジメントシステム）であり、ウェブで情報を共有するためのシステムである。Wikiを使うことで、例えば、授業で何らかの資料を用いて学生に説明しているときに資料中に間違いを発見すればその時点でその場で修正を行うことができる。

また、授業における学生のWiki活用メリットとして、①電子的な資料提供、②グループの資料置き場、③相互採点システムがあげられる。

実際のWikiシステムは自宅サーバ上に「家Wiki (<http://itasan.mydns.jp/>)」というサイト名で、運用されている。元来は家庭内の情報共有に使うためのものであったが、今年の夏前後に大学のサーバの動作が非常に不安定であったため、授業用情報共有サイトとして当初は一時しのぎの予定で利用し始めた。しかし半年以上経った今でも不都合がないため、そのまま利用している。コンテンツの更新が容易であるためか、他のサイトよりも更新が多いためか、量的に充実したためか、サイト内のリンク密度が高いためか、理由は定かではないが、多くのサーチエンジンで検索した場合、図書館学のさまざまなキーワードで上位に来るようまでになっている。

Wikiでサイトを運営する利点としては、①ページの作成・更新が容易である、②インターネット上の情報へのリンクが容易である、③掲示板の設置が容易である、④データの共有にも利用可能である、があげられる。一方で欠点としては誰でも書き換え可能な敷居の低いシステムであるため、セキュリティ面での不安があることである。実際に、リンクファーム(Googleのページランクをあげるための強リンクネットワーク)の構築のために、あるサイトからの不正な自動書き込みが数度に渡って行われることがあった。その対策として現在ではサイトに何らかの修正がされた時点で、電子メールで修正点が自動的に送信される設定としている。このような対策を取ることで、不正な修正のチェックと不正な修正がされた場合にも簡単に修正前の形に戻すことができている。

### 3.2 印刷資料の電子化演習

新機軸の二つ目として、全体テーマである「電子図書館あるいは資料の電子化」に関連させて、印刷資料

の電子化演習を初めて導入した。これは授業中に「印刷資料を1冊電子化する」体験を行うものである。目的は、資料の電子化がもはや技術的には容易であることを体験すること、関連付けて著作権問題の講義を行い、著作権に対する理解を深めることである。また、授業実施における現実的な目的として、調査が中心となる授業スケジュールに変化をもたせること、就職活動で休みの多い6月に実施することでたとえこの回を休んでも発表自体には直接的な影響が小さくなる配慮もある。

この演習を行うために、教員側でカッター、精密な裁断機（ディスクカッター）、両面スキャナ（オートフィーダー付）、パソコン、電子ブックリーダーを用意し、あらかじめ学生には不要な印刷資料を持ってくるように指示する。さらに、これらの印刷資料は、分解の手間を少なくするため、製本が簡易な文庫や漫画が望ましいとする。手順としては、①カバー等はずしカッターで裁断機に入る厚さに資料を分割する、②裁断機で背の綴じてある部分を切り落とす、③一枚一枚に分断された資料を両面スキャナに投入し、スキャンする、④スキャンされた画像ファイルを電子ブックリーダーの形式に変換する、である。本の厚さにもよるが分解を始めてからだいたい1冊15分程度で電子ブックリーダーでの表示を行うところまでできる。

この演習は予想されたように学生に評判は良いが、ただ、それだけで終わっては効果が低い。効果を高めるために、あらかじめ、「電子化の工程を理解すること」「電子化が技術的には容易であること」「著作権についての理解を深めること」といった目的を説明しておく。また、スキャンしている時間を利用して、あるいは、変換終了後に、技術的な解説やこのような変換に関わる著作権問題について講義を行う。

### 3.3 映像資料のなかの図書館

三番目の新機軸は、さまざまな映像資料のなかに登場する未来の図書館を画像やビデオを用いて紹介することである。全体テーマの「電子図書館」はある意味で未来の図書館像とも言えるテーマであり、映像の中で見ることで理解を深められることもあるかもしれないと考えたのである。

SF映画やドラマに出てくる図書館はいかにも未来の図書館像を表したものが多い。例えば『タイムマシン』(2002)には未来のニューヨーク公共図書館が出てくる。そこには印刷資料は置いてあるが飾り以上のものではなく、レファレンスにはデジタル図書館員が答

える。

映像中の図書館が出てくる場面を見た後に、撮影者たちの未来の図書館像はどのようなものか、現在、電子図書館と呼ばれているものとの類似点はあるか、といった観点から、話し合ってみる。そうすることで、自分なりの未来の図書館像を作り上げていくのである。

このような映像資料を用いた授業の効果としては、①学生たちの興味を引くことができること、②想像しにくい事柄をイメージで理解できること、③ちょっとした気分転換になること、があげられる。一方で、問

題としては、①授業内容と関連性が高い資料は少ないこと、②映像中の見てほしいことではなく他の事柄に注意が向いてしまいがちなこと、があげられる。

#### 4. まとめ

亜細亜大学図書館学課程では、発表形式の「図書館特論」を開講することで、図書館の現代的な課題を考えさせている。そのなかで、主体的に調査を行い、発表によって自己表現能力を高める取り組みを行っている。

### 【事例報告2】

## 学習・教育支援を担当する図書館員の養成プログラム

— ウェイン州立大学の事例を中心に —

長澤多代（長崎大学大学教育機能開発センター）

本日は、情報リテラシー教育を担当する図書館員にどのような資質が求められているのか、また、こうした図書館員を養成するためにどのような専門職養成プログラムが提供されているのかについて、米国滞在時の経験をもとにご紹介します。

#### 「図書館員のための指導法」

事例とするのは、ウェイン州立大学の図書館情報学プログラムが提供する「図書館員のための指導法」(Instructional Methods for Librarians)です。これは2003年の秋学期に新設されたコースで、私は聴講生としてこれを受けていました。

ウェイン州立大学の現職の図書館員2名が講師となり、ティーム・ティーチングで授業を進めました。開講時間は夜間（17時30分から20時15分）で、受講生は社会人学生を含む15名でした。指定されたテキストは『情報リテラシー教育：理論と実践』<sup>(1)</sup>です。

#### コース目標 (course objectives)

「図書館員のための指導法」には、次の6つの目標が設定されています。

- ① 図書館情報学における利用教育の歴史とその影響を理解する。
- ② 利用教育および情報リテラシー教育の基本的な概念と専門用語に習熟する。
- ③ 学習理論を理解する。
- ④ 多様な教育の方法・技法・手段に習熟する。

- ⑤ 情報リテラシー教育関係の専門家団体の発展と、その目的や機能を理解する。
- ⑥ 情報リテラシー教育プログラムの計画・導入・評価・見直しに必要な情報を、実際の作業を通して理解する。

#### 習得できる専門的資質 (competencies expected)

受講生には、コース修了までに、次の専門能力を習得することが期待されています。

- ① 利用教育や情報リテラシーの原理を習得する。
- ② 利用教育関係の専門用語を使用する。
- ③ どのような情報ニーズがあるのかを把握する。
- ④ 多様な指導の方法論の中からその時々に適した方法論を選択し、それぞれの情報ニーズにあわせた指導法を計画し、導入し、評価し、見直す。
- ⑤ 指導上の問題を解決するにあたって、適切な学習理論について検討し、利用する。

#### 学習の成果 (learner outcomes)

学習の成果として、次の5つが期待されています。

- ① 図書館、利用教育、情報リテラシーに関係する教育理論および学習理論とその役割を理解できるようになる。
- ② 利用教育を実施する図書館の役割を理解できるようになる。
- ③ 多様な指導法の違いを理解して、利用できるようになる。
- ④ 多様な指導用ツールの違いを理解して、利用できるようになる。

- ⑤ 計画、指導内容と方法の開発、実際の指導、指導内容や方法の評価と再検討など指導の方法論を理解し、実施できるようになる。

### コースの指導法

コースは、多様な指導法の組み合わせによって進められました。主な指導法は、講義、文献解釈 (readings)、クラス内のディスカッション、ゲスト・スピーカー、個人およびグループによるプレゼンテーションです。

### 成績評価の基準

- グループ・プロジェクトやクラスでのディスカッションにおける主導性 (15%)
- 紙媒体および Web 媒体の教材評価 (20%)
- 講師による実演の評価 (20%)
- 最終プロジェクト (40%)  
(配布資料が10%、プレゼンテーションが30%)
- クラスへの参加・出席 (5%)

### 授業の概要とテキストの該当項目<sup>(2)</sup>

#### 第1週「情報リテラシー教育の概論」

最初に情報リテラシーの概要が説明されました。図書館情報学に馴染みのない受講生もいましたので、講師や情報リテラシー教育の担当経験をもつ受講生が自らの経験をもとに「情報リテラシー教育とは何か」を説明し、意見が交換されました。

第1章「情報リテラシー教育とは何か？」

第2章「情報リテラシー教育の歴史」

#### 第2週「学習理論と学習スタイル」

情報リテラシー教育に関する学習理論と学習スタイルについて説明があり、質疑応答が続きました。この時間は、教育学のレファレンス係員である講師が概念を詳しく説明しました。

第3章「学習理論の略史」

第4章「学習スタイルの概観」

#### 第3週「批判的思考とアクティブ・ラーニング」

「批判的思考」と「アクティブ・ラーニング」の概要が説明されました。次に、受講生は、3-4人のグループに分かれて、アクティブ・ラーニングを導入したクラスにおける指導の目的・期待される成果・指導法について討論しました。

第5章「図書館の心配、知能モデル、概念的枠組」

第6章「批判的思考とアクティブ・ラーニング」

#### 第4週「指導計画：方法と内容」

学校図書館において情報リテラシー教育の担当経験をもつゲスト・スピーカーが1時間ほどスピーチをしました。ゲスト・スピーカーは、自らの経験をもとに、プログラム実施の準備・実施段階で図書館員が検討すべき事項と、関連する学習理論や概念を説明しました。その後、ゲスト・スピーカーと講師・受講生とのディスカッションが続きました。

第7章「情報リテラシー教育プログラムの計画」

第8章「指導方法の選択」

第9章「指導の内容」

#### 第5週「指導計画」

予算や情報ニーズなど情報リテラシー教育を計画する上で検討すべき事項が説明されました。これに続いて、受講生は、宿題として課せられていた紙媒体と Web 媒体で作成された教材（図書館の利用法を説明した案内やガイド）の比較検討の結果（それぞれの利点と欠点）を発表しました。そして、全員がこの結果を検討して、紙媒体と Web 媒体の教材の特徴を理解しました。

第10章「基本的な著作権と計画上の問題」

第11章「指導方法と教材の計画」

#### 第6週「評価」

評価の概念・方法・プロセスが説明されました。次に、受講生は、大学図書館、公共図書館、学校図書館の3つグループに分かれて評価項目を設定しました。そして、各グループの代表が設定した評価項目を発表して、全員でこれを検討しました。最後に、講師が、各グループの評価項目を批評して、館種による評価項目の違いを説明しました。

第12章「情報リテラシー教育プログラムの評価と見直し」

#### 第7週「指導の準備と発表」

指導のためのプレゼンテーションの準備と進行法について説明がありました。次に、報告書や論文に紹介された事例をもとに、プレゼンテーションを成功に導く技法が検討されました。

第13章「指導の準備と発表」

#### 第8週「多様な母集団・環境下の情報リテラシー」

情報リテラシー教育について利用者や館種によるニーズの違いやプログラム内容や方法の違いが説明されました。次に、学校図書館や大学図書館では、図書館が単独に実施するよりもカリキュラム統合型に発展させることが重要だとして、そのプロセスに必要な手続き

が検討されました。

第14章「多様な母集団のための情報リテラシー教育プログラムの計画」

第15章「多様な環境下での情報リテラシー教育の実施」

#### 第9週「テクノロジーの指導」

コンピュータ演習室において、講師が「ERICの検索法演習」を実演しました。この目的は、受講生に実際の情報リテラシー教育を観察させることと、受講生自身の情報検索スキルを向上させることにあったようです。実演後には、指導内容や進行法についてわかりやすかった点と改善すべき点が検討されました。

第16章「テクノロジーの指導」

#### 第10週「指導のためのテクノロジーの利用」

前週に引き続きコンピュータ演習室で、図書館員に必要なテクノロジーの操作法が説明されました。受講生は、指導に役立つソフトウェアの使い方について演習を通して学習しました。

第17章「指導のためのテクノロジーの利用」

#### 第11週「情報リテラシー教育の今後」

これまでに学習した内容が整理され、情報リテラシー教育の可能性が検討されました。

第18章「今後のビジョン：2つの見解」

#### 第12週～第15週 最終プロジェクト（模擬授業）

総まとめとして、各受講生が情報リテラシー教育プログラムの模擬授業を実施しました。ひとりあたりの持ち時間は45分（30分の発表と15分の質疑応答）です。受講生は、対象となるクラスを想定して、指導の目標、指導法、教材、学習活動、評価方法を計画します。模擬授業の当日には、図書館のコンピュータ演習室を使って、発表者が導入から終了までを進行します。講師と他の受講者は、発表者が想定した利用者となってこれを受け、評価をしました。

#### 最終発表の評価項目<sup>(3)</sup>

最終発表の評価用紙は、受講生が用意したものです。情報リテラシー教育を実施する上で気をつけるべき点を具体的に示していると考えられますので、その評価項目を紹介します。

評価項目は、15項目あり、「指導の始め」「指導中」「指導の締めくくり」の3段階に分かれています。

まずは「指導の始め」です。ここでは、4項目が設定されています。

\* 学生の注意を惹きつけたか。

\* 指導の目標を明確に述べたか。

\* 指導が妥当であることを明らかにしたか。

\* 指導内容を学習者のこれまでの学習やこれからの学習と結び付けたか。

次は「指導中」です。ここでは、7項目が設定されています。

\* 指導の目的を示したか。

\* 指導内容の各部分のつながりを明らかにしたか。

\* 指導の部分と全体が明確に関係づけられているか。

\* 適切な演習を組み入れたか。

\* 学生が参加するように常に配慮したか。

\* 重要なポイントを強調したか。

\* 学生の応答やコミュニケーションを促すのに、よい質問を使ったか。

最後は「指導の締めくくり」です。ここでは、4項目が設定されています。

\* 学生に指導が終わりに近づいていることを知らせたか。

\* 指導内容の全体を要約したか。

\* 指導内容をこれまでの学習やこれからの学習と結びつけたか。

\* 指導の終わりに十分な時間をとったか。

発表者は、受講者から評価用紙を受け取り、自らの指導内容や方法を見直します。発表の様子はビデオで録画されていますので、受講生は自分の発表を自分で観察して評価することもできます。

本日は「図書館員のための指導法」の概要を紹介しました。以上で私の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

- (1) Grassian, Esther S. and Kaplowitz, Joan R. *Information Literacy Instruction: Theory and Practice*, Neal-Schuman, 2001, 468p.
- (2) Instructional Methods for Librarians, 2003年秋学期シラバス（ウエイン州立大学・図書館情報学プログラム）
- (3) 評価用紙(San Jose State UniversityのIT関連科目)  
<http://www2.sjsu.edu/depts/it/edit186/mod3k.html>  
(2005.4.12採取)

本年度の会費（2000円）を納入して下さい。



## 【事例報告 3】

# 技術ではなく志を育てる職員研修

— 東北大学での取り組み事例 —

米 澤 誠（東北大学附属図書館工学分館）

### 1. 志を育てる研修とは

図書館の利用価値を高めるには、利用者教育により図書館を活用できる利用者を育てることが重要である。そして、効果的な利用者教育を行うためには、適切な能力と資質をもった利用者教育担当者を育てることが必要である。

利用者教育担当者に求められる能力と資質としては、① 情報リテラシーの知識と技術、② 教える技術と経験、③ 志と意欲の3つが考えられる。①については職員向けの講習会の実施や参考資料の整備、②については教授法の研鑽と実践が必要である。これらは、多くの図書館でも職員育成の方策として試みているところである。

本報告では、志と意欲という資質を育てるために意識的に試みている実践事例について報告したい。この資質を育てるために東北大学では、「良質の仕事への関与と見聞」、「最新情報の把握と関心」という視点から、各種プロジェクトや研修を立案してきた。以下、この2つの視点から、各種プロジェクトと研修について紹介したい。

### 2. 良質の仕事への関与と見聞

#### (1) 情報探索マニュアルの作成

東北大学附属図書館では、『東北大学生のための情報探索の基礎知識』（以下、『基礎知識』）を作成・刊行している。初版は2003年版であり、2004年には『基本編、2004』として改訂・刊行した。さらに2005年には、新たに『自然科学編』を作成・刊行した。<sup>1) 2) 3)</sup>

これらの編集には10名以上の図書館員が関わり、通常業務では体験することのない原稿執筆という仕事を体験することとなった。『基礎知識』はWeb版でも公開しているが、体裁を整えた冊子を刊行することを目標の一つとした。ある程度経費をかけた冊子を刊行することは、おのずと各自の分担する章の内容と文章の質を高めることとなった。また、改訂版や新版の作成作業を開始する時には、執筆メンバーの変更・増強を行い、少しずつ経験者を増やすという配慮も行った。

完成した『基本編』、『自然科学編』は、他機関でも改変して利用できるよう、WORD原稿をオープンソースとして提供している。提供先は、既に約40機関に上っている。また、オープンソースの直接利用ではないが、『基礎知識』の影響により各大学で同種の目的をもった情報探索マニュアルの刊行が相次いでいる。なお、これら『基礎知識』をめぐる一連の活動により、『基礎知識』作成グループは平成17年度(2005)国立大学図書館協会賞を受賞することとなった。<sup>4) 5)</sup>

以上のように、他大学にとっても利用価値のある仕事を成し遂げたということは、さらに志と士気を高める結果になったものと思う。

#### (2) 情報探索に関する授業の支援

『基礎知識』の刊行を契機として、教員による授業「情報探索・レポート作成術」の開設が実現した。この授業の企画・立案は図書館側で行い、各コマは教員が担当している。各コマには情報探索の実習を盛り込み、図書館員が実習の指導・補助を行っている。

実習部分とはいえ、授業の指導・補助を組織的に行うということは、我々としては初めての試みであった。教育の現場で教員と連携し、直に学生と接して指導するということは、教える技術と体験を深めるよい機会にもなったのである。

#### (3) 東北地区大学図書館協議会での共同執筆

『基礎知識』での経験と成果を実績として、東北地区大学図書館協議会で情報リテラシーに関する冊子の共同執筆を行うこととした。これは同協議会の60周年事業として提案したもので、新入生を想定した大学図書館の基本的な活用法を示す約30ページの小冊子を作成・配布することとしたのである。

この小冊子を共同執筆することは、協議会に参加している各図書館にとっては、一定レベルの適切な教材を共有・利用できるというメリットがある。また、執筆に参画した各大学の図書館員にとっては、共同執筆作業を通じて、執筆能力の向上を図るという効果を期待した。

2005年1月から編集を開始して、5月に原稿が完成した。7月には、協議会参加の65図書館に小冊子『図

書館のすすめ』を配布することとなっている。なお、この小冊子の原稿もオープンソースとして提供する予定である。<sup>6)</sup>

#### (4) 展示会および関連企画の開催

東北大学では、1998年度から毎年1回、図書館資料の展示会を開催している。各回ともテーマを設定し、古典資料を中心に一般市民をも対象とした展示・解説を行なっている。また例年開催期間中に、展示内容にあわせた記念講演会を開催してきた。

2004年度の展示会では、「江戸の数学 —いま、和算がおもしろい!—」というタイトルで、日本一のコレクションである和算資料を取り上げた。記念講演会には、気鋭の和算研究者とともに、和算小説の第一人者である作家の鳴海風氏を招いた。

また、初めての試みとして、和算に関するシンポジウム「和算と仙台 —現代における和算再興の取り組み—」を企画した。このシンポジウムでは、宮城県図書館、一関市博物館、宮城県第一女子高等学校、東北大学などにおける、和算資料を活用した取り組みをとりあげることで、広く一般市民や和算愛好家、教員の関心を高めることとなった。この展示会とシンポジウムの開催がきっかけとなって、和算の存在がマスコミに数多く取り上げられ、注目されるようになった。シンポジウムの企画と実施には多大の労力を費やしたが、結果として図書館の企画・実行力を高めることになったと考える。<sup>7)</sup>

#### (5) 研究者支援ワークショップの開催

東北大学では、我が国の学会誌を電子化により広く世界に発信するプロジェクトであるSPARC/JAPANの普及・促進に、早くから取り組んできた。2002年度には、東京以外では初めてSPARC/JAPANの説明会を開催し、『東北数学雑誌』（東北大学理学研究科数学専攻）と『Materials Transactions』（日本金属学会）の在仙2誌が選定される契機となった。

2003年度には、東北大学の数学専攻および国立情報学研究所（NII）と共催して、世界的な数学分野の電子ジャーナルサイトProject Euclidを、我が国の数学雑誌編集者に向けて紹介するためのワークショップを企画・開催した。このワークショップには、米国コーネル大学のProject Euclid関係者および国内の主要な数学雑誌編集に関わる大学教員・図書館員が多く参加し、SPARC/JAPAN普及活動のモデルとなる大規模なワークショップとなった。

このワークショップの実施については、図書館側が

全面的に企画・立案し、成功裏に終わった。そのため、関係した教員から図書館の企画・実施力が認められることとなり、翌年度も同様の国際的なワークショップへの協力を依頼されることとなった。

### 3. 最新情報の把握と関心

#### (1) 職員向け情報探索講習会の開催

『基礎知識』の刊行をきっかけとして、同書をテキストとした職員向けの情報探索講習会を企画・開催した。これにより、『基礎知識』の成果を職員全員で共有するとともに、執筆者以外の職員も同書の存在に関与するという副次的効果を期待したのである。

講習会は、講義だけではなく実習を中心にした形式とし、知識として見聞きしていた情報探索ツールを実際に使って体験するということを目的とした。これにより、レファレンス担当だけではなく多くの職員が、最先端の情報探索ツールについての知識を身につけることができた。

#### (2) 貴重書連続セミナーの開催

資料の性格上、図書館の貴重資料を取り扱う担当者は限られてしまう。そのため、どうしてもそれらの資料に関して語るだけの知識をもつ職員が少なくなってしまう、見学者などに対する説明も特定の職員に偏りがちとなる。

しかし、自館の貴重資料についての知識なしに、それらの資料を活用した利用者サービスの展開は考えられない。また、それら資料について熟知することなしに、誇りをもった図書館サービスは不可能であろう。

このことから、2004年度から貴重書連続セミナーと称して、職員向けに各種貴重資料の解説を行なうという試みを開始した。解説する貴重書は、①和古書、②文書、③洋書古典、④マルクス関係資料、⑤漱石文庫、⑥和算資料の6種のコレクションとし、各解説とも同内容で2回ずつ開催して全学の図書館職員の参加を募った。

このセミナーは、図書館員として資料名だけは見聞きしていた貴重資料の内容を、あらためて学習するよい機会となった。各図書館員が、今後、一般向けの展示会やセミナーを企画していく上での、出発点となることを期待している。

#### (3) 講習会プレレクの開催

情報リテラシー教育や学術ポータルの企画など、先端的な試みを展開するに従い、全国的な図書館員の研修会・講習会などで講演や発表を行う機会が増えてき

た。それらの講演・発表を「講習会プレレク（プレレクチャーの意）」と称して、事前に学内の職員向けに実施することとした。

これは、参加者にとっては、受講しなければ聞くことができない最先端の講演・発表内容を、学内で聞くことができるというメリットがある。一方講演者にとってみても講演・発表の予行演習となり、参加者からの意見により内容の改善を図ることができるというメリットがある。2004年度は、「図書館ポータルへの動向と展望」、「利用者リテラシー教育の実践」、「事例発表：東北大学の利用者教育」の3つのプレレクを実施した。

#### (4) 学術情報発信セミナーの開催

大学からの情報発信の必要性と方策が議論される中、情報発信の動向と最新技術についての知見を深めるために、2002年度から毎年「学術情報発信セミナー」を開催している。講師としては、図書館職員だけではなくシステムベンダーなどの人材も活用し、メタデータやOAI-PMHなどの最新技術動向の紹介を行なっている。

これには、学内の図書館職員のみならず、東北地区の大学図書館にも参加を促し、中央の最新情報を地域に流通させるという地域ハブの機能も果たしている。また、この種のセミナーに参画することにより、企画・実施力を身をもって体感するという効果もあると考える。

#### (5) EJ/DB情報交換会

2004年度から、主に電子的情報サービスの最新動向について知るためのEJ（電子ジャーナル）/DB（データベース）情報交換会を開催している。電子的情報サービスの担当者にだけ提供されがちなこの種の最新情報を、広く学内外の図書館職員が見聞きできるような場で紹介するようにしたのである。

2004年度は、「OVID」、「Web of Knowledge」、「Landolt-Boernstein」、「GALE Resource Center」、「紀伊國屋書店の電子図書館ソリューション」などの内容の紹介を行なった。前記の学術情報発信セミナーと同様、地域のハブとしての機能も意識して開催している。

## 4. 最後に

以上報告したプロジェクト・研修は、大半がその都度思いついて企画・実施してきたものであり、長期的視野にたった計画性のあるものではない。その意味で、常に試行錯誤して進んでいるものであるといえる。

図書館職員の能力と資質を向上させるには、手取り足取り教える研修会を用意することよりも、学び向上したいという志と意欲を育てる方が重要と考える。それさえあれば、「教わる」のではなく「自ら学ぶ」ということで能力と資質が向上していくものと信じている。

そのための方策として東北大学では、「良質の仕事への関与と見聞」、「最新情報の把握と関心」という視点から、各種プロジェクトと研修を行なってきた。斎藤孝氏のいうごとく、「最高のものを知れば、あとは自ずとわかるようになる」（『座右のゲート』より）のである。その成果はまだ実を結んでいないかも知れないが、興味を持って自主的に企画・実施するという気風は、図書館職員の中に根付いてきているように思う。

また、志の高い人材をえるために、これらの取り組み状況が分かるような就職希望者向けのサイトも設置している。良い人材をえるための積極的な広報は、非常に重要な活動であると考えられる。<sup>8)</sup>

以上、図書館の現場での試みである本報告が、利用者教育の担当者の育成を考える上で、何がしかの参考になれば幸いである。

#### 関連文献：

- 1) 東北大学附属図書館『東北大学生のための情報探索の基礎知識。基本編2004』 同図書館、2004年
- 2) 東北大学附属図書館『東北大学生のための情報探索の基礎知識。自然科学編2005』 同図書館、2005年
- 3) 東北大学附属図書館「東北大学生のための情報探索の基礎知識 2004/2005」  
URL: <http://www.library.tohoku.ac.jp/mylibrary/tutorial/>
- 4) 米澤誠ほか「情報探索マニュアルの作成と職員向け講習会の実施：東北大学附属図書館での事例報告」『大学図書館研究』(69) 2003年12月、pp.34-41
- 5) 菅原透ほか「情報探索マニュアル作成を軸とした情報リテラシー教育の展開とオープンソースの試み」『医学図書館』52(1)、2005年3月、pp.25-30
- 6) 東北地区大学図書館協議会『図書館のすすめ：大学図書館利用ガイド』 同協議会、2005年
- 7) 米澤誠「広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法」『情報の科学と技術』55(7)、2005年7月、pp.305-309
- 8) 東北大学附属図書館、受験者向け情報2005「図書館職員を目指す若者のために」、  
URL: <http://www.library.tohoku.ac.jp/pub/recruit.html>

## 利用者教育の観点からの教育モデルの再構築

コーディネーター 大庭 一郎 (筑波大学図書館情報学群)：《コ》  
パネリスト 山田 茂雄 (鶴見大学文学部)：《山》  
安形 輝 (亜細亜大学図書館学課程)：《安》  
長澤 多代 (長崎大学大学教育機能開発センター)：《長》  
米澤 誠 (東北大学附属図書館)：《米》

### 1 記念講演と事例発表についての質疑と応答

《コ》 本日は、日本図書館協会の図書館学教育部会の企画といたしまして図書館の業務モデルと教育モデルという一連の企画の4回目として、プログラムを設定させていただいております。サブタイトルといたしまして、利用者教育の観点からの教育モデルの再構築ということで、ここで午前中の基調講演と午後のお三方の事例報告をちょうど終えたところです。本日の司会進行を担当するのは筑波大学の教員をしております大庭です。どうぞよろしくをお願いします。

先ほど、皆さんからご質問・ご意見を頂戴しておりますので、まずはそれに対して、それぞれご説明、補足していただくというところから進めてまいりたいと思います。もちろん頂戴した質問以外にも当然今これからの話を聞かれていて、あるいはまだ質問を出していないけれどもこれからまた疑問に思っているということが当然出てくると思いますので、ぜひ、積極的にご参加いただければと思います。

それでは、最初の質問ですけれども、安形先生にご質問が出ております。「ウィキの説明の中に相互採点システムというものがありました、機能等について補足をお願いします。」と、かなり技術的なご質問です。安形先生、お願いいたします。

《安》 「ウィキ」の機能自体にこのような機能があるわけではなくて、私が独自に開発しているものとしての総合採点システムということなんです。「ウィキ」ですと、誰が、今アクセスしているかというのが、なかなか分析しづらいのですけれども、一応、簡単なログインシステムと、つまり誰が入って、そして、誰が採点をしているかというのが、まず追跡できるような形で、アンケートフォー

ムのような形でそれぞれのプレゼンテーションに関する項目があって、それを選択すると自動的に点数が集計できるといったものです。

《コ》 次に、長澤先生にかなり具体的な質問がいくつか出ています。「プレゼン演習が30分ということですが、この時間がすべてでなくて30分は全体の一部という想定でのプレゼンテーションの演習でしょうか」という質問ですが、長澤先生、お願いします。

《長》 いろんなプレゼンがあると思うんですけど、30分の時間が与えられたと想定してやってくださいということですので、その30分の中で最初から終わりまで全てを盛り込むというプログラムでした。指導の一から十までを、その30分に入れるということです。

《コ》 ちょっと込み入った質問なんですけども、「聴講生として具体的に何を学ばれて、ご自分として最も身に付けて帰国したものは何でしょうか。」という踏み込んだ、でも、かなりリアルなご質問かと思えます。これは、日本の現場に対する問題点は何であるかと考えているかということとながっているかと思えますが、ご感想等がかまわないのですけど、お答えいただければと思います。

《長》 来ないといいなという質問ですけど、やっぱり、教育理論から広く図書館員が理解していないといけないなと感じたので、まあ、私は全てを聞き取れたわけじゃないのですけれども、何が大事なのかという枠組みというものを知ることができたというのは、本当によかったと思います。それで、その理論面から、実際にスキルまでこう幅広く学ぶんだなあということを知ることができたということと、それを学んでいる学生さんのスキルが変わっていくんですね、ディスカッションをするにも、ずいぶん内容も変わってきますし、最後のプ

プレゼンテーションのところで、活かされている人と活かされていない人がいましたけど、まあ、このように活かされるのだという、そのプロセスを、実体験を通して観察者として見ることができたということと、受講者として体系的にどういう枠組みで勉強したらいいのかということを知ることができたということがよかった点です。

《コ》同じ方からあと一点だけご質問が関連して出ていまして、「その結果長崎大学では何を実践したか、応用されることは可能なのでしょうか。」という質問が出ているのですけれども、それは、長澤先生の、ちょうど、ご専門と結びつくご質問かと思うんですけど、よろしくをお願いします。

《長》私が所属しておりますところは、大学教育機能開発センターといいまして、教養教育ですとか、主に学部教育を改善するのに関わるセンターです。その中で私が担当していますのが、評価FD部門といいまして、全部の先生が学生から授業評価を受けないといけない、で、受けたときにどう改善していけばいいかというのが大事ですので、私は、そちらの「Faculty Development」(授業改善)というのを担当しております。先生方のティーチングスキルを改良するためのプログラムというものを、やっているのです。その、企画を私たちの部門がさせていただいているのですけど、その中で、図書館員の方に、教員に対してそういう情報リテラシー教育というのですか、授業を準備するための情報を使う方法のようなものを伝えてもらっています。その中にプレゼンテーションのスキルですとか、あと、学習理論をしたらいいねという段階などを、伝えてはおります。でも、まだプログラムとして確立したものがあるといよりは、少しインフォーマルなレベルで話したり、そういうプログラムがあるときに補足の説明という形で、今のところ活かしております。今回、私は戻ったらインフォーマルな学習グループで、この情報をシェアする、一緒に共有することがあると思います。まあ、ちょっと勉強会を企画しませんかというのは、提案していこうかなと思っています。

《コ》長澤先生のご説明にもありましたように、長崎大学は、結構教員のFDに力を入れておりまして、何年前でしたか、この大学教育機能開発センターができましたのは。

《長》ちょうど4年目になりますね。2002年4月に発

足しました。

《コ》FDとか、あるいは教育を支援するためのセンターを学内に設けて、そのなかに、高等教育に関わる教員を全国から集めたわけですけど、その中の一部門に図書館学の研究者をちゃんと当て込んで、センターを立ち上げているという意味では、私が知っている限りでは、非常に発展的といえますか、見識のあるセンターだなと思っております。あと一点、お尋ねします。感想とご意見なんですけど、長澤先生に関する質問なんですけど、「現在日本の大学図書館では、多くの情報リテラシー教育が行われていますが、今回お話しいただいたような体系的なプログラムを受けないままに行われているのが現状であると思います。こうした内容を、実務に携わる図書館員が身につけるためには、どのような研修あるいはリカレント教育が可能であると思いますか。ご意見を伺えたら幸いです」ということです。これは、若干補足いたしますと、教育部会の今回のテーマとも絡んでいるのですけど、業務モデルとして、情報リテラシー教育あるいは図書館利用教育という概念が、現場では求められています、大学図書館では学生に関しても必要ですし、長崎大学でお考えのように教職員に対しても必要であるという認識が高まっています。その場合に図書館員がもっともっと積極的に関われるはずなんですけど、でも残念ながら米澤さんのご説明にもありましたけど、図書館員はそんな養成教育は受けていなかった。でも求められている。という状態で、全国の志の高い図書館員の方は、模索されているのが日々である。そのような思いもあって、このリカレント教育は研修ということにどういうふうな可能性があるのかというご質問だったと思うのですけど、長澤先生、この点につきましては、まだ、実現できる、できないは別としまして、何かお考えがありましたら、お願いしたいと思います。

《長》私はFD担当で、たぶんFDの研修とよく似ていると思うのですけど、教員のための改善プログラムを担当する担当者のための研修というものが、アメリカで今度あるのですけど、一週間五日間の規模で朝から晩までいろいろなセッションが組み込まれて開かれます。その理論的な側面から、みんなで情報ディスカッション、共有したりですとか、実習も組み込まれた五日間のコースなんです

けど、そういうのを、アメリカのFD関係の専門家団体が、二年に一回やったりしているんですね。そのような形で日本でも、それこそこの図書館学教育部会ですとか、集中的な研修で、いろいろな講師を呼んで、それこそ教育学の講師もいるでしょうし、図書館学でもいろんな先生がいると思うのですが、そういう組み合わせたワークショップの週間みたいなものを組んだらどうかと、私は個人的にはそう思います。

《コ》ありがとうございました。今の点につきましては、ご質問が終わったあと、いろいろ議論がでてる大事なテーマなのではないかと思います。その間で、長澤先生の事例報告にも出ておりましたが、教育理論的なことを図書館員が学ぶ必要がある、あるいは、そういうプレゼンとかをやった場合、評価することが重要だと、どう評価したらいいのかということが問題になってくると思うのですが、ちょうど、そのことに関して、山田先生と、事例報告の安形先生に対して質問が出ています。「山田先生、あるいは安形先生の授業でプレゼンテーションを積極的に取り入れていらっしゃいますけど、学生同士の評価は、どうやってやられているのか、あるいはどういう評価ポイントでプレゼンを評価されているのかお教えいただけないでしょうか。」という質問がでております。山田先生、これは先生の大ベテランの領域ですが、お話を聞かせてください。

《山》私の評価はですね、ほんとに雑駁なもので、今日、長澤先生の評価項目を拝見して、こんなに項目を細かくしてやったほうがいいのかということ、今後の参考にさせていただきたいなと思っているのですが、私が例えば、二分間スピーチなんかでもですね、あんまり細かく評価をしますと、その場で即回答を求めますので、大雑把に、例えば「二分間スピーチ」で大事なことは、なにしろPRをするわけだから、「その中身が魅力的であるか、それから全員の学生に生徒に伝えられるかどうか、この大きな声で表現ができるか、それからその態度としてですね、教師としてさあこれからやるぞという、一番最初の出会いですから、その気持ちが前面に現れているかどうか」、その三つをですね、三段階に、評価をするということです。その中でその3点とも、よければ、Aと。それから、まあまあだとBだと。それで、声も小さ

いし、態度も意欲もないと、そういうのはCだとか。こんな大雑把な項目をつけております。それもひとつですね。例えば道德の授業指導案を示して、模擬授業をやった場合なんかには、できるだけ細かい項目を作っていくということで、それぞれの授業によって、評価を私が雑駁に決めていたり、または、細かく示したりしてやっているということですね。

《コ》つぎに安形先生、プレゼンの評価につきまして学生同士の評価はどのようにしているのかということなんですけど。

《安》私の授業では、調査に基づいたプレゼンテーションをするということですから、大きく調査ですね、調査をきちんとしているかという点、あとプレゼンテーションの仕方がどうかという二つの、まず大項目を立てまして、その下に例えばプレゼンテーションの仕方でしたら、スライドと口頭の説明があつてるとかですね、技術的な話をかなり多く項目を立てて、評価をさせています。一番最初のころにですね、それぞれの学生同士の点数をつけてくれといったときにどうしても、どういう点で評価をしたらいいのか、一応大きな項目としてプレゼンの仕方と調査の仕方をちゃんと評価してくださいといっているのですが、プレゼンテーションを見るのも、学生さんたちは初めてというか、あまり経験がないものですから、どのような点を見ればいいかわからない、評価がうまくまとまらなくて、なんというかそれこそ、いきなり100点をつけちゃったり、0点に近いような点数をつけてしまったり、どうしても混乱してしまったりということもあつまして、それで、かなり項目を立てまして、項目それぞれについて、採点をしていくようにしました。最後に合計をすれば自動的に全体の点数がでるといったような採点表を二年目以降つくりました。で、今年は、採点表ではなくて、ウェブのほうで、すぐにだから自分のしたプレゼンテーションに関する評価が見れるようにして、フィードバックがうまくできるようにと考えています。

《コ》続きまして、米澤さんにいくつかご質問がきております。「米澤さんの事例報告の中で、総合科目の企画と支援という言葉が出てきましたけど、職員が企画をして教員が講義をするというのは、具体的にはどのような作業分担で行われているの

でしょうか」ということなんです。これはどういうことでしょうか。

《米》今回、授業構成を考えるとときには、教員の協力者の方がいっしょになかったので、図書館のほうでこういう授業内容でやりたいと、このコマはこの先生にお願いしたいということで企画いたしました。その後、実際に授業をやるときには、それぞれの先生の受け持ち分担をコマごとに事前の打ち合わせを行いまして、どういう内容で先生にお話をいただくか、それからそれに合った実習を行うには、どういう実習をやるかというのを相談いたしまして、実習等については、図書館のほうでチェックして問題を作って、主に教員の方々が講義の部分をやっていただくような役割分担をいたしました。

《コ》ということは、講義のときは図書館員の方は、先生と一緒に後ろで聞かれているということで、実習演習のときには図書館員の方が学生さんの指導に当たるという理解でいいですね。2件目と致しまして、「各種の企画を教員にPRする方法としてどのようなやり方をお取りになっていらっしゃるのでしょうか。」というかなり実践的なご質問なんですけど、それについていかがでしょうか。

《米》例えば、データベースの説明会とかについてですが、実は私も初めてそういうことをやってみて、学内にどういう風に広報していけばいいか、よくわからなくて、とりあえずポスターを作ってみるとか、あるいは図書館の速報紙に載せてみるとか、いろいろやってみたのですが、あんまり食いつきはよくなくて、図書館の中にポスターを貼っても、先生がたは見るわけでもないですし、図書館の広報誌に出しても、あまり注目度が高くないので、最近はもちろんホームページに掲載しますけど、学部経由で教員のほうにメールを転送していただくように、PDFか何かにポスターみたいなのを作って、各部局に通知しているようにしています。そうすると、やはり、関心のある方は集まります。それから後は、ものによって、例えば、自然科学関連データベースでやるときには、そこに集中して力を入れて、今、そのデータベースを使っていっしょの研究室のほうには、必ずポスター送りつけて貼ってもらうということで、十分に関心を高める効果があったと思っています。あとは、そういった雑誌を作ったときには

ですね、そのデータベースを使っている研究室には、印刷をして送って、見ていただいている、ということをしております。

《コ》あと一点、質問がありまして「現在米澤さんは工学分館にご勤務いただいておりますけど、何らかの全学的な利用教育を考える組織とか枠組みがあって、そこに参加することで、関われるのでしょうか」という質問ですが、これは、いかがでしょうか。

《米》今、私は工学部の図書館ですが、その前の三年間は本館と中央図書館の総務課の情報企画係というところで、まさに企画を立てておりました。そのときに今言ったような全学的なワーキングを立ち上げて、これは全学でやろうという形にいたしました。それは今も残ってしまっていて、私が転出して工学部の図書館に行きましたけれども、そのワーキングのメンバーとして働けるようにはなっておりません。ただ、実施主体は後任の者に引き継いで、そちらのほうに中心となって動いてもらって、私は途中で口を出すだけというような楽な立場になっております。ですから、このマニュアル作りと、それから授業の支援とそれから講習会の実施、こういったものを全て情報リテラシーに関わるような活動は、そのワーキングのメンバーが分担して行っているという体制を今年度からきっちりつくっております。

《コ》ちょっと細かい踏み込んだご質問なんですけど、長澤先生に質問が来ています。「ウエイン州立大学の授業科目中で内容構成に関して、カリキュラムを検討するのは、第4週と第5週なのでしょうか。その2回分で十分なのでしょうか」という質問なんですけど、その点はいかがでしょう。

《長》最初に申し上げましたが、この枠組みというのは、文献を各二章ずつくらい各週に読んでこないといけないのですが、その順序として第3週目と第4週目くらいにカリキュラムの指導計画を立てるといふのをやったことになるんですけど、ここでは基礎をまずやるという感じで、概念を整理したり、どういうプロセスがあるという基本事項をこの3週4週で整理して、そのあと、実際に先生が模擬授業されるときに、その枠組みというものを少し示しながらされますので、実際にされているものを見ることができまして、12週目から15週目までの4週間かけて、みんなはこのプロセ

スを経験しないといけません。それで自分で経験しながら、その途中途中で先生に質問したりとか、ディスカッションの時間にそういうのをディスカッションしますので、これは基礎を学習する、全体像を学習するのが3～4週であって、評価の項目は、評価の項目を評価する日も設けられていますので、その分を詳しくすることになりますので、4週と5週だけが、それに関わっている週ということではありません。ここでは、基礎的なことを学ぶ週、そのあとは実習を通して学びます。あとは各論みたいな形で学ぶこともありますので、より詳しく学習できるチャンスはあると思われま

《コ》あと一つ、e-learningにまつわる質問があります。あとの議論のほうに絡んでくると思いますので、ちょっとあとで使わせていただきたいと思えます。紙で頂戴した質問につきましてご回答いただきましたが、せっかくここで対面式といえますか、わざわざ連休の狭間の日にお集まりいただいておまして、自分はしゃべりたいという方はたくさんいらっしゃると思います。face to faceでご質問を頂戴したいと思います。

## 2 情報基礎教育と図書館の実施する情報リテラシー教育

《柴田正美》帝塚山大学の柴田です。今、大学図書館で情報リテラシー教育をどんどんやり始めているのですが、一方では、高等学校で情報科が必修になってきている。その過程で、現在大学の一年生に入ったときに行われている情報リテラシー教育がどんどん我々が今までやってきているような利用者教育がその部分に入ってくる可能性が出て来ています。今まででしたらWordだとかExcelだとかそういったものを教育していた部分が、高校でやってきたから大学で教える必要はないとなると、我々が教える必要はないということになってきたというような流れがあると思うのですが、その辺はどのようにお考えなっているか、お聞かせください。

《コ》今の柴田先生のご質問は全員にに対して、ご意見を伺いたいというものです。ご質問の趣旨は、中学校や高等学校の学習指導要領が変わりまして、部分的にはございますが、中学校レベルあるいは高等学校レベルでいわゆる情報リテラシー教育

の中のコンピュータリテラシーといえますか、コンピュータ技術に関わる部分は教え込まれようとしている、でそうなってきた場合に大学で若干、教養教育の中でもその手のものやっていたが、重複するといったものがでているのですが、実は大学では何を、例えば大学という場だったら何をやっていけばいいかというお考え、ご質問かと思うのですが、その点につきましては、まず安形先生からお尋ねします。どのようにお考えでしょうか。もっとも、これは情報リテラシーの定義とも絡んでくる問題で、なかなか根が深い問題ではあると思うのですが、どうでしょうか。

《安》大学のほうで情報リテラシーという科目も担当させていただいているという立場で話します。図書館学の教員としては、図書館学教育から、コンピュータリテラシーに対して、その比重がどんどん少なくできるんじゃないかという時代になってきたときに、「文献の調査法ですとか、そういうものを入れてほしい」という風に言うのですが、どちらかというコンピュータ関係の先生からは、今までやってきたようなことができるならばもっと高度なWordの使い方、もっと高度なExcelの使い方というような形で言われ、どうしてもそちらのほうになってしまっているというのが、うちの大学の現状です。何とかして図書館的なものを、うちも図書館員の方にお願ひしてですね「情報リテラシー」という科目の中で図書館オリエンテーションプラスアルファのことをですね、単位をとるための必須事項としてやらしてはいるのですが、それ以上のことはなかなか難しいというのが現状であります。

《コ》長澤先生はいかがでしょう。

《長》私も安形先生に賛成でコンピュータのほう、コンピュータリテラシーの部分を減らして、図書館の担当する情報リテラシーの部分を入れ込んだらいいと思うのですが、情報の探索法がメインになるのではなくて、それをどう整理して表現していくか、だから、どう加工、整理ですね、どう分析してそれをどう処理をして、どう表現をしていくか、発表するか、あとレポートを書くかというプロセスがありますけど、そういう部分も入れて、より高校時代よりも詳しい情報リテラシー教育になっていったらいいんじゃないかと思えます。で、そのときは図書館員の方だけではできないと思



ますし、東北大学のときは、教員が担当されたとおっしゃっていましたが、チーム・ティーチングなんかでやっていく、それでそのプロセスを指導していくという形ではないかと思います。

《コ》図書館現場の米澤さんはどうでしょうか。

《米》私、図書館員でもあるのですが、高校生の娘もおりまして、その娘がですね、情報の教育を受けたといったのですが、とても聞くに耐えない内容でしたね。それなんなの？って感じですね。せいぜいパソコン使ってなんか一つやったという、本当の意味での情報リテラシー教育は、現在のところ行われていない。それはだんだん改善されてきて高校出たくらいだと、だれでもパソコンは扱える、将来的には、そういう世の中になると思うのですが、それはそれでいいことで、わざわざパソコンの使い方を図書館員が教えるというのは、やっぱりちょっと無理だと思うのです。で、我々としてはやはり文献の調べ方から、それをどういうふうに整理してどういうふうにまとめていくかというのを、図書館員だけでなく先生と一緒に教えていくのがこれから大学の情報リテラシー教育だと思います。そういうことが大事だということが、今実は東北大学なんかでもちゃんと先生方の認識になっているかどうか、ちょっと疑問のところがあって、なかなか組織だったカリキュラム、ちゃんと全員受講できるというカリキュラムが組み込まれていないという点が問題だと思います。それを何とかできればと思っています。

《コ》事例報告のお三方の意見を頂戴したのですが、大学の先生であられる山田先生は、学生さんのコンピュータを使う力だとか、あるいは図書館を使う力だとか、先生という立場からどのようにお考えで、これ以降身に付けてもらえばいいなというものを先生はどのように考えていらっしゃいますか。

《山》具体的なことはですね、実際に教えていらっしゃる原田先生がここにいらっしゃいますので、ご発言いただきたいと思っています。

《原田智子（鶴見大）》まだ、一年しかおりませんので、明確には言えません。今の学生にとってメールはほとんど携帯なんですね。ですからパソコンで何かを探するというのも、課題が出たら使うという程度なんです。レポートは全部ワープロじゃないと受け取らないというふうに話をしています。

図書館学だけでも今年は190人超えているので、どうしようと思っているのですが、とにかくワープロで提出してください。とすると、私、字をきれいに書きますから勘弁してほしいという学生もいるのですが、実はまだいるんです。で、大半の学生は何も言わずにワープロで出してくれるのですが、そういう状況の学生さんが中にいるということ自体驚きなんですけれども、情報リテラシーといっても、今の学校で教えているのは、コンピュータリテラシーであって、実際には、図書館リテラシーを全然学ばない学生さんが多くて、図書館には課題が出れば行く。課題が出ても、ノートパソコンで比較的自由にインターネットが調べられると、今度は逆に図書館を全然利用しない。全く図書館がレンタルDVD屋さん化してしまっていて、図書館にはほとんど学生がいないのです。そういう状況が一方であるので、両方とも含めて、やはり、図書館リテラシーを向上させるためには、新しい時代の教員は、教育の指導法を勉強すべきだなと感じているところです。そういう意味では、長澤先生のお話はとても参考になりました。

《コ》どうもありがとうございました。他にご質問とかご意見とかございましたら、頂戴したいのですが、何かございませんか。

### 3 利用教育の方法論をどう身に付けるか

《糸賀雅児》今、高校の教科：情報をやってきた学生が入ってきて、今後、大学教育の導入教育としてやる情報リテラシー教育が、我々がここで考えて、今日、色々な事例発表があった方向に、果たしていくのかどうか。安形さんなんかはむしろ違う方向に行っちゃってる、むしろ高度なコンピュータリテラシーに向かっている。そういう現象が起きるのは、私、今日の4人の発表を聞いて、よくわかったんです。山田先生が言われたのは、主として教員養成の話ですよ。教員養成の場合は、学習指導要領がかなりはっきり決まっているんですよ、その学習指導要領に決まった内容を、将来教員になる学生がどうやって組み立てて教えていくかというのだからいろんな事例発表が立てられるんですよ。問題は図書館の利用教育の場合には、その場合の学習指導要領にあたるようなものがないんですよ。それで、私、先ほど、長澤さんに聞いたのは、アメリカの場合、つまり、何を

教えるかについて、どれだけ時間をかけて考えているのか。つまりですね、私、東北大学のこれ（『東北大学学生のための情報探索の基礎知識』東北大学附属図書館）を見せていただきました。これなかなかよくできているし、こういうのをやったら、すごく学生に効果がある、おそらく図書館の利用者というのは増えると思うんですね。これ見たときに、これは要するに探し方というか、ツールの解説が中心ですよ。例えば、新聞記事の探し方とか、あるいは本・雑誌の探し方、雑誌論文の探し方、これはいわゆる従来のレファレンスツールの構成をほぼそのまま踏襲しているように思うんですよ。で、果たして利用者教育を考えたときに、特にそれを教えられるような図書館員を養成するときに、そういう教える内容が果たしてそれでいいのだろうかということ、私は知りたかった。つまりですね、長澤さんのこの発表を聞いたときに、ウェイン州立大でやった授業のタイトルがInstructional Methods for Librariesですよ。これはメソッドが中心なんです。私は、本当に教えるコンテンツが大事で、どういう内容構成でやっていけばいいかということ、図書館員が考えられるかどうかの問題だと思う。つまりですね、色々な方法、つまり山田先生や安形先生が言われたように、一般に学生にプレゼンテーションをやらせれば、それなりに表現力が身についたり、人前でしゃべる力がついたりとは思いますが、問題はそういう内容のことを学生やこれは公共図書館にもっていくと、それは一般市民なんですね。どういうことを一般市民に教えていたら図書館のことをよくわかって活用してもらえるか、そういうことを図書館員が考えられないといけない、だから図書館員がこういうコンテンツを組み立てられるかどうか、つまり教員の場合の学習指導要領にあたるようなものを図書館員が考えられるかどうかということ。ところが、いいですか、小・中・高の先生の場合には学習指導要領としてかなりはっきりしたものがある。ところが図書館の利用教育に関してはそういう指導要領に当たるものがないんですよ。だから図書館員が独自に組み立てなければいけない。その場合に利用対象、ターゲットを絞って、この人たちにはこういうステップでこういうふうに教えると図書館を活用してもらえるんじゃないかということを考えなくちゃ

いけない。そういう力がつくような教育を、我々図書館学教育部会の教員はやっていかなきゃいけない。それで、私は、アメリカはどうなっているのかなぁと思って、このさっき言われた第4週5週は、わりと一般的だと言いましたよね。つまり、最後12週から15週で、学生は最終発表するわけですよ、そのときに学生は組み立てなくちゃいけないですよ。どういうふうな内容の利用教育をやればいいのか、一番効果が上がるのか、その時間は、だからどこでやって、どうやったら組み立てができるのか、それをアメリカの場合どうやっているのか知りたかった。それを今度は日本に持ってきて、日本で図書館員が自分たちが組み立てて、それを実際にプレゼンテーションしてやんなきゃいけないですよ。で、東北大学を見ましたら、わりと従来のレファレンスツールの解説をほぼ踏襲している。それでいいんだとしたら図書館員は楽なんです、ホントに。自分が受けたレファレンス教育をそのまま今度は利用者に対してやればいい。ただ、私は正直言ってそれでいいのかなと思うんですよ。例えば、どういうテーマを学生は見つけるのか、それから自分の主張を裏付けるためにはどうしたらいいのか、どういう根拠を挙げていったらいいのか、ということで組み立てるべきであって、本を探すにはこうだ、雑誌の論文を探すのはこうです、行政資料を探すにはこうです、というのは、わりと図書館の受入や資料の分類の発想なんです。実際に使う人が本当にそういうように考えているかどうかは、私は別じゃないかと思うんですけど、そういうことが組み立てられるような図書館員を育てないと、たぶん図書館員は今後評価されないかも知れないと思う。そういう意味で繰り返しになりますが、長澤さんの場合、アメリカでコンテンツのほう、Instructional Contentsという表現が妥当かどうか分かりませんが、Instructional Contentsをどうやって身に付けようとさせているのか。それから東北大の米澤さんの場合に、今後もこういう内容でずっと継続されていくのか。実際の学生の反応ですよ。反応とはたぶん、実際、図書館に来て何を聞かれるのか。ある程度ツールの探し方はこれでわかった。で、それから先に進んで学生がレファレンスの質問を図書館に寄せてきたときに、次にどういう内容を教えていかなきゃいけない

か、当然見えてくるはずなのです。その辺実際に図書館の現場にいらして、こういうのをやってみて学生の反応はどうだったか、今後、どういう方向で教えていく内容を組み立てていこうとされているのかを、是非教えていただきたい。

《コ》今、糸賀先生からのご質問が出ましたけれども、長澤先生に対してと米澤さんに対してのご質問が中心のかと思います。まず、長澤先生の方ですけど、先ほどの補足という形でご説明くださればと思うのですが「利用教育の方法論を、アウトラインから理解することはできたが、それぞれの館種とか、図書館員あるいは情報専門職とかが、それぞれの場でそれぞれの組織とか、組織の利用者とかにあった構図でコンテンツを組み立てて、教材を構造化していく。その手の教材の構造化とか図書館員がコンテンツを組み立てられるようにするための、教育方法はどうか？」というのが、糸賀先生のご質問のエッセンスかと思うのですが、その点はどうか。

《長》この中で特にコンテンツについて考えるということは、なかったように思うのですね。学生が図書館員の場合はsubject librarianだったりして、心理学を専攻してたり、看護学を専門にしておりますので、それを活かして、最終発表しましたので、学問的なバックグラウンドというのは、それぞれのもっているサブジェクトを使ってやりました。ですから、そっちのほうでは授業の中では、メインにはやっていなかったように思えます。ウェインじゃないんですけど、今、アーラムカレッジにダイナム・オーバーという結構有名な前向きの図書館長がいて、そのアーラムカレッジは教養カレッジなんですけど、そこの事例調査をしているのですが、そこでどういうふうに準備しているのかと聞きましたので、ご紹介しますと、図書館員はそれぞれsubject librarianで、歴史学を専攻してたり、地理学を専攻したりしているのですが、最初にシラバスをWeb上で取り入れて、自分の担当する歴史学なら歴史学の先生に「もし新学期が始まる前に準備とか、なんかお手伝いができることがあったらしますよ」というメールを出すんですね。それで返事が返って、どういう課題をいつにするのか、どういう目的なのか、というのを先生と実際に会ってディスカッションして、そこから情報を得て準備するらしいんです。

メインはシラバスの情報ですね、日本では授業概要が分厚いものがシラバスといわれていますけど、アメリカのシラバスは、全部一週間ごとにどういう課題をどういうテーマでやるのかを、この、6〜7枚あるんですけど、どういう目的だとかも、いろいろ載っていますので、まずそれを入れて、それプラス教育のディスカッションでコンテンツをまとめるようにしています。それで図書館員は準備するという形でやっている。情報源は教員から得ている。コンテンツは、自分のもちろんsubject librarianとしてのバックグラウンドもありますけど、より具体的な科目でのコンテンツとしては教員から得て、準備をしているということがあると思います。

《コ》アメリカの場合やはりその図書館員の養成がマスターコースレベルで完結するというのもありまして、学部段階での何らかの専攻に、そのバックグラウンドをもってマスターに入ったりしています。既に職場にいて、大学図書館のたとえば医学図書館で生物か何かの図書館にいてマスターを取りに来ている。現場にいて、現場ではかなり確定したフィールドを抱えていて、かつ主題領域はずっと学んでいるという背景を持った上で、library scienceやinformation scienceを学んでいるという構図があるので、コンテンツに対してほぼ勘所がおさえられているということと、長澤先生のご指摘にありましたようにあちらの大学のシラバスは日本のようなアリバイ的なシラバスではないので、週単位で何をやるのかということがクリアーで、課題文献が書かれていて、かつ評価方法が完璧に書かれている。以前は差し替え（加除式）だったのが、いまやそれがネットに公開されている。あるいは、MVPのように授業の答弁を全部ネットに出して公開しているというのが、高等教育にはかなり普及しているという状態がありまして、そういう基盤の上で図書館員と担当教員がディスカッションしてコンテンツを固めていくという土壌があるということ、糸賀先生のお話と長澤先生のお話を聞きながら思ったわけです。こういう土壌がないといわれている現場で志高く実践されている東北大はどうかと、お話は続いていくわけですけど、米澤さんのところではいわゆるコンテンツを組み立てる、あるいは、優れた教材をどんどん作られているわけですが、今後はどう

いう方向をお考えなのかという糸賀先生のご質問にお答えいただけたらありがたいのですが・・・

《米》今まで学生に対する図書館のツールの紹介ということで、我々はまとめてみたのですが、実際それを使って授業をやってみるとほんとにわかるのですが、ぜんぜん意図しない学生さんたちの行動というのはいろいろあって、そういう意味で半年間始めて、経験をもって、実際にコンテンツを作るというのは、我々は経験がなかったので、授業の内容そのものがそのコンテンツであるというのが今回の回答であるというふうに思っております。その授業の経験を踏まえてこの冊子体そのものを変えていくのか、また別の授業の進捗に添った形のものにするのか、まだ白紙状態で、確かにまだツールの使い方だけでなく、なぜ使うのか、どういう場面で使う必要があるのか、それを使ってどうやってレポート等をまとめていくのかというやっぱり一連の教育を図書館としてではなく、大学としてしないと、いわゆる社会に通用する、あるいは研究者として通用する学生にならないというのは痛切に感じております。

《コ》いろいろ話題が出てまいりましたが、ほかにご意見、ご質問等はございませんでしょうか。せっかくですから続けてお願いします。

#### 4 JLAの図書館利用教育ガイドラインとの関わり

《前川和子》大谷女子大学の前川と申します。ちょっと気になるのでお尋ねしたいんですけど、日本図書館協会では図書館利用教育委員会というのが前から活動してくださっていて、そして各館種のためのガイドラインができていました。それらは、私たちの前から基本的な知識というか、共通のコンセンサスではないかと私は思っているのですが、そういったものがある背景に中心メンバーだった丸本郁子先生という方が、その前から短期大学を契機にしまして、利用教育のワークショップを3年間されているんですね。それは、各学科を持っている図書館員がその学科の学生に対して利用教育をするということですから、具体的に学科学生をどう利用教育するかということで開いているワークショップですから、具体的な事例がたくさん載っている、そういう報告書もずいぶん見ているんですけど、そういったものをご発表の方々は一応ベースにされて、参考にするというか、思いの中にちょっ

とあって発表されたり、そういうものが意識としてあるのかどうかを伺いたい。そしてコンテンツというものをどんなふうに考えていらっしゃるのかということをお聞きしたいと思います。

《コ》それではまず、今日の研究集会を企画した側のほうから若干お話しします。図書館学教育部会のほうで新しい教育のモデルを検討していくに当たりまして、近年、情報リテラシー教育や利用教育が大事だということで、このテーマ、今年の第1回研究集会において導入教育を課題にした利用教育を取り上げたことがございました。当然、日本、私の浅い理解では、日本図書館協会の中で利用教育委員会がございまして、丸本先生とか仁上さんとかをいれて、すべて活動されている。特に大学図書館・短期大学図書館を主体に、大学図書館利用教育の本も出ておりますし、ガイドラインも全5巻シリーズ。で、大学図書館にいたっては、2年前ですか、いわゆる利用教育をどうしたらいいかという優れたマニュアルもつくられているというのは、ご存知のとおりだと思います。ただ、教育部会としては利用教育そのものをやるというよりも、そういう利用教育がやれるという教員をどう育てていくか、図書館員と学生をどう育てていく場を設定していけばいいのか、それは司書課程であったり、あるいは4年制大学であったり、あるいは、現職教育の場であったり、いろいろ設定はございますけど、それを考える素材として特に利用教育を取り上げたわけでありまして、で、今回事例報告とか基調講演とかお願いいたしました先生方につきましては、そこまで基礎情報をお話した上で、ご紹介するという意味も私どもは、教育モデルを再構築するにあたりまして、いろんな観点から司書養成教育の中でいろいろな、いわゆる積極的に資格につながるような資質を育てるようにしている安形先生、あるいは、利用教育そのものをあるいはFaculty Developmentそのものをご研究いただいている長澤先生、あるいは実際にほんとに国立大学で積極的に活動を展開されている東北大学の米澤さんだという風に、実際にやられている方のお話を伺いたいということで設定をさせていただきますので、そこまでのコンセンサスを提示した上でお話しをお願いしております。

《前》ありがとうございます。

《コ》ただ、大学図書館の世界では、丸本先生、椎葉

先生のご尽力によって、ほんと土台ができあがっている。それがやっと、導入教育ですとか、利用教育ということで花開こうとしている。だけど、先程柴田先生のご懸念にもありましたように、かたやコンピュータリテラシー教育という狭い概念で捉えがちな教育でありますので、もう少し、図書館情報学に関わっているものが携わっていけばよりふくらみがあり、より実りのある教育展開ができるのではないかと、個人的には考えています。ほかにご質問等ございませんか。

## 5 大学での図書館利用教育と公共図書館

《大塚》埼玉県草加市立中央図書館からまいりました大塚と申します。草加市立中央図書館の近くにある大学があるんですが、そこではもしかしたらじゅうぶんな利用教育のようなものがされていないのかもしれませんが、国際関係の学生がよく見えます。で、館種の違いさえもよくわからずに、私どもにいろんな質問をされます。さらに大学図書館の方から連携の話が出ていますが、先生方のほうで公共図書館の連携とかそれについての考え方とかありますか。ぜひ教えていただきたいと思えます。

《コ》糸賀先生が一番お詳しい方なので発言いただけるのではないかとと思うんですけど。

《糸》なぜ、司会の方が私に振ったのかわからないんですけど、ご存知のように私は慶応大学で図書館情報学教育をやっています。今のようなご指摘、公共図書館に何もわからない大学生を送り込むのは困るというようなお言葉をよくいただきます。で、今、あの実践報告といいますかね、事例報告をしていただいた方々により、いろいろと大学生に対して図書館利用教育というのを実践していらっしゃる。これが始まったのはここ4、5年ですかね、関心も高まり、そこはやはり、大学としてある程度、学生の品質管理といいますかね、世の中に送り出すにあたって、少しこの情報の話し方なりわかった人間を送り出さないといけないのではないかと、ある意味、大学の危機感も配慮にあって、こういう風な関心に高まったのだと思えます。ただ、それにしても、そういう教育をきちんと受けて、今、私が言うような品質管理ができたというのは、全体のやはり、ごく一部なんです。で、これは一般に、私立大学では、教授や図

書館の規模に比べれば、学生の数が非常に多い。そのために、一部なのか、かなりの方かわかりませんが、公共図書館のほうにあって、本来大学図書館に関わるべきことについて、公共図書館にお世話になっていることがある。これは、大学の教員の方もがんばらないといけない話で、今日の事例報告で私も、大変心強いと思いましたが、そして今日会場にお集まりの方は、比較的、大学図書館の方や職員の方が多いです。そういう方たちがこれからそれぞれの大学でいい図書館教育や情報リテラシー教育をやっていただければ、今よりは、学生は情報探索だとか、情報の活用面で自立できる学生が増えていくと思います。で、ただ、どうしても大学図書館だけで完結するわけじゃありませんので、私はある意味で公共図書館と大学図書館と、そして大学の教員との連携の中で、もう少し、完成度の高い、図書館利用教育というか、図書館を使いこなせるような人間が育っていくように思えます。そういう意味ではですね、私、小学校段階から小、中、高の、いわゆる義務教育だとか高等学校の段階での図書館利用教育と、大学に入ってからでの利用教育、そして地域の公共図書館での、まあこれは利用教育という言い方はなじまないと思いますね、利用案内と、そういうのが相互に持ち寄る部分ですかね、連携する部分はあるだろうと思います。日本の図書館界の大きな課題だし、ひとつは学校教育の中でもう少し図書館を使ったような教育をしてもらえると、その辺については今日はなかったですけども、これは文部科学省の方ですから、文科省のほうに、お願いするようなこともできますので、今後、考えていきたいと思えます。いい着眼点、いい視点を提供していただいてありがとうございました。大学人の一人として、今後、ご期待に沿えるような努力をしたいと思えます。もちろん、今後、教育部会でも志保田新部長も、この辺の必要性は十分お分かりになっていると思いますので、これからの教育部会の活動にも注目していただきたいと思えます。

《コ》ご回答ありがとうございました。公共図書館側から提起されたような視点で思いつく点があります。それは、糸賀先生がおっしゃったように、小学校、中学校の段階にいい意味でのよりよき市民を育てる一環として、学校に対して、図書館って

こういう風に使えるんですよってアピールしていくこと、学校教育をサポートすることが大事じゃないかなと思います。

《大塚》今、お話ありましたことなんですけど、現時点、中学校からも図書館の利用案内とかそういう話をしてほしいと言われたことがありました。

《コ》やはり、その総合的学習の時間等の関係もございまして、今までのような、学習指導要領に定まった教育だけを展開するのではなくて、うまくいったかどうか、いろいろ批判もございまして、児童、生徒が自ら学ぶような環境を設定し、個々の課題を解決するよう積極的に、展開している学校もございまして、そういう学校に対しましては、逆にその、残念ながら日本の場合、公共図書館とか大学図書館の重要性やよさが、欧米に比べますと、認知されていない。で、そういう状況、やはり認知されないので図書館は悪い、図書館はだめなんだ、と図書館員側が悲観的に思っているだけではなくて、やはり図書館員の側がこういう風に使えるんですよとか、あるいはもっと役に立てられるんですよ、という風に、学校教育側、大学の教員側にPRしていくことが重要ではないかと思えます。もっとそういうお声が中学校からかかっているようでしたら、負担がかかってお忙しいかもしれないですけど、連携協力していただくと、よりよき市民が育って、その方たちがよい図書館のユーザーになってくださるのではないかと思います。非常に気の長い話ですけど、やはり、ここはやっぱり1850年代から、図書館というものが大事だ、よきものだという認識で育ってきた国々との違いではないかと思えます。実はその図書館に対してのイメージのような、日本の図書館をよくするために、いいイメージをもってもらう、あるいは、そういうことが大事だと思います。

《長》私、今、教育開発センターにいまして、初任者教育とかも、すごく考えるセンターなんですけど、教養セミナーというのがあります、半期の授業ですが、問題解決能力を育成するということで、あとは、全部教員に任されているんですけど、結構、地元のことを知る、調査に行ったりすることもできますので、地元のことを調べたりする学生が多いんですね。特に長崎ですと、いろんな歴史がありますので、大学では、そういう情報が弱いので、公共図書館の方には、地元の資料のパス・

ファインダーですかね、そういうのを作っていたくと助かるなというのは感じていました。

## 6 e-learningを図書館利用教育に役立てる

《コ》それでは、いただいた質問の中で、今まで取り上げなかったテーマに移ります。「図書館の職員とか利用者教育や、情報リテラシー教育といった分野でe-learningがどう使われているか、という点に興味があります。」というご質問をいただいています。安形先生とかこのあたり、お話しするような気もするんですが、いわゆる遠隔教育といえますかe-learningとかいってましたけど、何かお考えございましたら、ご意見をいただけるとありがたいんですけど。

《安》私自身の考えというのではないんですけど、亜細亜大学の図書館ではですね、図書館の職員が企画をしまして、図書館を使うためのビデオを作っております。今で言うとDVDですね。それでそのDVDのですね、なんていんでしょうか、全体ではないんですけど、それぞれのパートに分かれたところを、今、実際に図書館のホームページからですね、インターネットにつながる環境でしたらどこでも見られるようになっている。つまり、図書館オリエンテーションですね、図書館オリエンテーション等に参加できなかった学生たちもそれを見れば一応うちの大学の図書館の使い方は一通りわかるというふうなものを提供しているようになっております。これがe-learningにつながるかどうかわからないですけども、反響は結構あったということで、それなりにうまくいったのではないかと、うちの大学の構成員としては思っています。

《コ》ありがとうございます。実際に大学図書館勤務の米澤さんは、このあたりはe-learningといえますか、教材を開発されたり、あるいは大学生の方たちにレポートの書き方とか、文献探索に関する科目をもたれたりされているのですけど、自己学習用とかの絡みで、こういうe-learning的な発想とかお考えになったり、あるいは興味をお持ちでしたら、ご意見をください。

《米》残念ながら考えておりません。私はあんまり好きじゃないんですけど。あんまり自分で好んでしようとは思わないですね。むしろ図書館員が前にいて、面と向かって話をする機会のほうが、そっ

ちに力を入れたほうが良いと思います。e-learning というのはサブ、やはり補助的な役割で、図書館員が前面に出て、利用者と向き合ってやることで、初めて利用者の利用状態も分かるので、その顔の見えないようなものは、あまり私は好きじゃない。東大でもe-learning的な教材をおつくりになって、公開していますが、その辺のお話もご紹介いただけるかなと。

《コ》東大の小山さんがお越しですので、ご紹介いただけるとありがたいのですが・・・

《小山憲司》東京大学情報基盤センターの小山と申します。米澤さんからお話がありましたように、東京大学の方では、図書館とは別に情報基盤センターというところがございまして、図書館の電子化に関わる業務については、こちらの基盤センターの方で担当しています。ちなみに私はデジタルライブラリー係というもので、資料の電子化ですとか、デジタル資料とかそういったものを担当しております。その隣に学術情報リテラシー係というところがございまして、そこでデータベースの検索の仕方ですとか、電子ジャーナルの使い方ですとか、そういったことを中心に実際に講習会を定期的開催したり、面と向かったface to faceの講習をしております。それ以外にe-learningというほどではないと思うのですが、オンラインチュートリアルという形で、雑誌記事索引の使い方ですとか、電子ジャーナルの使い方ですとか、そういったコースウェアをインターネット上に載せております。それは、おそらく学外からでもアクセスしていただけるかと思えます。それは利用者向けなんですけど、図書館員向けということで、昨年度から図書館員向けに研修会というか、そういったものを企画しております。全部で4回か5回くらい行ったんですけど、その内容をパワーポイントでプレゼンテーションすると、そのパワーポイントもインターネット上に載せて、講習会に参加した人だけでなく、参加できなかった人も後から見られるようにという取り組みを行っております。残念ながらそちらについては学内公開のみだと思いますので、皆さんには見ていただくことはできないんですけど、そういったこともやっております。ちなみにオンラインチュートリアルとか、あともう一つ別の利用案内のビデオみたいなものも製作しているんですけど、担当係の者は、あんまり

出来がよくないので、案内したくないということなんですけど、ぜひこの機会に一度見ていただいてこんな感じのものかと体験していただけたらと思います。

《コ》長澤先生はこのe-learningについてなにかお考えはございませんでしょうか。

《長》学生対象でもいろいろ長崎大学で動いているんですけど、先ほど申しましたように教員対象のFaculty Developmentを担当する部署に在りまして、いろんなワークショップを企画しています。例えばパワーポイントの使い方ですとか、図書館員の方々が担当するのは情報探索の方法とかです。長崎大学はキャンパスが3つに分かれていて、中央キャンパスでワークショップをしますと、ほかのキャンパスの先生がなかなか通えないということで、そういうFDのワークショップのコンテンツを録画して、オンラインFDという形で公開するというのを企画しています。今、準備中なんですけど、シラバスとそれに伴う教材プラス講師が実際話している映像を抽出してそれを公開する予定です。おなじような形で図書館の情報検索法も準備をしているところです。そういう形で先生向けに、実際にface to faceでやるのと同じものを、こられない人のために準備するというのをやっております。

《コ》それは、公開された場合でも学内限定のアクセスになりそうですかね。

《長》いや、そうではないと思います。うちのFDは「FDを受けました」という受講証明書というのが出るんですけども、その受講証明書が特に医学部ですと、昇進のときに必要になりますので、それが、結構、動機づけになっていて、普通のワークショップをしても8割がたが医学部の先生となっています。それが背景になるなどして、受講証明書がどうしてもほしいという先生、そのface to faceのワークショップに来られない先生のために、オンラインFDがあるんですけど、その中の設定には受講証明書を発行していただくための、通信教育的なことも組み込まれています。学外の方はそういうシステムはないにしても、情報は公開されると思います。

## 7 これからの図書館員養成教育

《コ》なかなか大変な時代になってきているというこ

とですけど、受講生の方を増やすためにはなかなかいいことではないかと思います。

残り30分ほどの時間になってまいりました。いろんな論点が出てまいりましたが、4回ほぼ連続しまして、図書館の業務モデルと教育モデルということで、研究集会を続けてきたわけでございます。で、こういう情報リテラシー教育、あるいは利用教育に関わるような図書館員、これから図書館員になるであろう大学生を教育する場と、あるいはすでに図書館員になってしまわれた現職の方を教育する場に、私たち図書館学教育部会のメンバーの者は関わってくるんじゃないかと思えます。で、現在の大学生が学ぶ場合、短大レベル、あるいは4大の課程レベルとか、守備範囲が若干違いますので、どこに焦点をおくか議論がなかなか難しいかと思えますけれども、これから図書館員になろうとしている人たちには、こういうスキルをもって図書館に入っていたきたいという思いは当然現場の図書館員にはあるかと思えますし、米澤さんのプレゼンテーションの中にも、東北大学は、こういう人を求めているんだというご紹介がございましたけど、米澤さんとして、この手のより積極的、教育的側面とかに絡んでいく、あるいはいろいろ企画、立案とかプログラムを組み込んでいけるような図書館員、これから東北大が求めていらっしゃると思いましたが、そういう人に育ってもらうために、いわゆる大学生のときに、図書館情報学教育とか利用教育のときに、こういうのを強調してやっていただきたいとか、ご意見ご要望があれば、お伺いしたいと思うのですが、何かございますか。

《米》非常にむずかしいご要望なんですけど、今、図書館が行う情報リテラシー教育に関する授業ってないですよ、それを何とか、どういう形であれ、1コマでも何分間かでも、やはり現場の図書館でということが重要視され行われているかというのは重要だし、それらを自分の中で押さえてほしいですね。それから、これほどめまぐるしく図書館の環境が変わってきている状況で、最先端、最新の、例えば大学図書館の現場で、現場はこうなっていると、あまり学生さんに伝わっていない気がします。最新の現場の状況が1コマでも、皆様に紹介していただけるようなものがあると、就職を試みたらびっくりするという事はない。やっ

ぱり入ってきてからそれが分かるということはいっぱいありますから、図書館学の授業の中だけで、いろんなスキルを身につけることは不可能だと思います。で、入ってきてから、意欲を持って取り組む人であれば、大抵のことはできる。意欲のある人であれば、細かな実質的なところを知るのは、入ってきてからでもいいと思います。

《コ》今、図書館の現場が非常に変わってきていることを伝えるような設定、あるいは、最先端の現場の話をぜひ1コマでもいいからお話しいただくような場があればというご指摘と、当然そういう資質とか、まかなえないわけですし、やはり職場に入ってきてから、意欲的に学べる人を養成していただきたいというご意見が出たわけです。当然、私自身かつて大学図書館に勤めていたこともありまして、今日の米澤さんのお話は興味深く聞かせていただいたんですが、やっぱり入った職場、若いときにいい上司にめぐり会えるかどうか、大事じゃないかなと、昔の図書館員、大学図書館、国立大学の図書館に勤めた者としては、感じるわけですね。米澤さんのような職員の下で若いときに過ごせた方は、仕事への関与とか見聞とか、あるいは、最新情報の把握とかの関心を持つ機会を、米澤さんがいろんな場面で、ポイポイと与えられて、部下の方は、それを取り込んで、一所懸命やられているような印象を受けるんですが、そういう風にその、若い部下を育てる環境がほしいところです。最近是非常に大学図書館の中はギスギスしてきているように思えるんですね。独立行政法人に変わって、今まで以上に採算性とか説明責任を問われるようになりまして、中堅どころの課長、部長をしたクラスが方向性をもてないとは職場で聞いておりますけど、その中で米澤さん自身はこういう人を育てることが大事だと思われるようなきっかけとは、もしかしたら私、国立情報学研究所でお勤めになっているからかなと思ったんですけど、そんなことはございませんか。NIIはかなり意識して展開しているように思えるんですけど。

《米》そうですね、私、学術情報センターというところで合わせて10年間勤務したのですが、やはり、あそこの勤務では、普通の大学図書館とは全く違って、毎年、毎年新しい事柄があって、そこで学んだことは非常にいい機会だったと思うんです。で、翻って大学に入ってみると、人を育成することを



真剣に考えているという人はあまりいない。やっぱりその場の仕事をこなすことが前提で、まあ、最終的にやはり図書館活動というものは、もちろんお金も資料も必要なんですけど、人だけはそろえることはできると、それが図書館の一番大きな財産ですので、悲観的ではないのですけれど、そう思います。

《コ》今、現場での職員のリフレッシュ教育といえますか再教育の重要性、その場合、上司といえますか、中堅、幹部の重要性というのがあるかと思えます。それと同時に司書課程の中で、安形先生の事例報告にもありましたように、どうしても図書館の雰囲気が好きだとか読書は好きだけれども、人と交わるのは嫌いだったり、あるいは積極性にかけてりだとか、どうも一般的にいえないのですが、筑波大学の学生を見ていても、全てではないですけど、そういう人が図書館に行かれちゃ困るなという学生が散見されます。単なる本好きだったら図書館に行かれたら困ると、ちゃんと私どもはビシッというようにしておりますので、そこは変わらないと思います。やはり積極的に仕事を展開していける、あるいは自己学習、自己表現ができるような学生をちょっとでも育てていく、もちろんそれは、短大、あるいは4年制大学、全ての教育の中で展開していくべきものでありますので、司書課程の科目、あるいは図書館情報学の科目だけでは、それがまかなえるものではないでしょう。限られた20単位とかの省令科目の中でも、工夫をしていけば、例えば、安形先生のところの図書館特論のような取り組みができるのではないかと考えられます。ほかにこの手の利用教育ですとかリテラシー教育ですとかについて、こういうところで教えていっちゃう、こういう方法があるんじゃないかというご意見をいただけますと、新しい業務モデルとそれに対応した新しい教育モデルの再構築というところで結びついていくのですけど、なにかご意見とかご提案とかないでしょうか。

## 8 資質と教育

《米》山田先生にお教えていただきたいのですが、わりと現場職員の方々は、こういう資質云々という言い方は許される傾向にあるんですね。ですが、これは教育ですから、資質というか個性とかを云々するのはあんまりよくないというふうに個人的に

は思っているんです。どんな人でも最初は確かにそういう積極的なことは苦手という学生さんであったとしても、逆にそういう人材は「できる人材」にしておかなければ、教育の意味はない、と私は思うんですね。教職の課程の中で、当然中には、先生というものは好きじゃない。人前でしゃべるのは苦手とか、そういう学生さんとかいらっしやると思うんですね。でも、それでも訓練をさせることで、最低限のことはできる人間をカリキュラムを通して育てていくような取り組みというものも、大事な機能だと思うんですけど、その辺はどうなんでしょうか。まず山田先生の、そういう教職の中でそういう学生の資質、個性を個人に還元するのではなくて、そういう学生が来たとしても、やはりカリキュラムの中で、教師として最低限必要なものを備えた人材にして送り出すのが必要なんじゃないのかなと漠然と外部から思っているのですが、そういった事実ということと、それを踏まえたうえで、司書課程で授業として単位を入れることで、少しでも蓄積になるのかということと、安形さんと長澤さんにちょっとご意見をいただけたらと思います。

《コ》それでは、山田先生お願いいたします。

《山》おっしゃるとおりでして、教員の資質ということで、国の方針の中に、特にグローバルな人間を育てようということで、最近、国旗、国家の問題にかなり厳しくなっているというのは、そういう背景があるわけですね。ですから、一人ひとりの、もちろん個性というものはあるわけですよ、教員の資質というものはですね、ほんとにありとあらゆる分野においてですね、人間的にももちろん技術的にも、いろいろ方法的にも、生徒の関係も、全ての領域について最低限持っていなければいけないというものを、教師の特に2年前から新しいものとして設けられた。それで、こういう資質を持っていなければならないというものは、最低限というものはあります。それは授業の中でやっていく。ですから、それを私が受け持っているいろんな科目の中で、育てていくと、理論だけじゃなくて、それこそ体験しながらというふうに、私は思っております。ちょっとはずれるかもしれないですが、ずいぶん学校も変わってきていますね。新しい教育は、もう学校ですべてを教えるんじゃないと、学校、家庭、地域で教えているんだとい

うことですね。地域の方たちは教育ボランティアということで、私がいた最後の学校は新設校で100名の教育ボランティアがいたわけですね。その中に読み聞かせ、紙芝居、そういう方がいました。地域の人は、グループがあるんですね。そうすると、その人たちが、低学年なんかは読み聞かせをしてくれるんですね。ほんとに先生にできない、すばらしい読み聞かせをしていただく、で、地域の人が教師を育てていくという取り組みもありますね。それから家庭のお母さん方にも学校の図書室を大いに利用していただくことで、たとえば、本の修理だとか整理だとか、順番に、いわゆる図書室を活用していただくというようなことをやったりしています。で、私、一番感心したのはですね、鎌倉の国立大付属小学校の講師をやったときに、ほんとにすばらしいと思ったのは、司書教諭の方が卒業するときに貸出しカードをリボンをつけてプレゼントするわけですね。そうすると、6年間であなたはこれだけ本を読んだ、すばらしいねということで、全員に貸し出しカードをプレゼントする。これはですね、みんなだんだん伝統になって、私はこんなに厚くなった、そのために本を読むという、小学生の中にはいますけど、しかし、それがですね、ずいぶん図書室の利用に役立っている。ですから図書室の本の貸し出しの数がすごい。司書教諭がいろんな工夫をしていく必要があると、そんな風に思いました。ちょっと余計なことですが。

《コ》安形先生お願いいたします。

《安》うちの図書館学課程ですと、やはり、報告の中でも言いましたが、もちろんまじめなんだけど、物静かな学生が多いんですね。積極的にならない学生が多いものですから、どうしてかということ考えたときに、やはりうちの大学の学生の学力とかを考えますと、ある種のコンプレックスをもってですね、どうせ自分がやっても、がんばってもこの程度だというくらいですね、自信がないというのが大きいじゃないですかね。ですから、図書館学のなかだけで、できるかどうかわからないんですけど、少しでも自信を持っていただいて、積極的になれるような教育をしていきたいというように考えている。それで、また、ちょっと違う話なんですけど、先程のe-learningにもしかすると少し関係するかもしれないんですけど、ある年

に、チャットのシステムを授業の中でのコミュニケーションに導入したことがあったんですけど、不断はほとんどしゃべらない学生が、実際かなりしゃべった、よく打ち込んだというのもありまして、非常に驚いたということもあります。それで、ちょっと思ったことが、人と話すときの、口頭で話すというチャンネルもあると思うんですけど、電話なり、チャットなりというチャンネルも考えられるんじゃないかと。そして、図書館の司書といっても、必ずしも表に出るだけではなくて、裏方といいたいでしょうか、またe-learningですかね、情報リテラシーのe-learningをするときの、例えば窓口になるだとかいう場合には、もしかしたら直接人とは会わずにある種の、電話等の話だけかもしれない。そういったものには、もしかしたら、そのような人も向いているんじゃないかということで、しゃべれないからだめというわけじゃなくて、何か一つあったら伸ばすという形でやっていく。チャットに関しては、その時に授業の中で使えるチャットはないかと探したんですけど、使えるようなものではなくて、個人的にe-learning上といいたいでしょうか、授業で使いやすいチャットのシステムを作っております。それは教員がよい発言を残して置けるとか、より目立つ発言をしたい場合は、その発言が見えやすいような形で残るといような形で、最終的に授業の資料として残るといような形にしたいと思っています。

《コ》長澤先生お願いします。

《長》私は、実習や授業を通して、それなりのスキルを身につければ、ある程度、自信の基礎となるようなものはできるんじゃないかと思いました。ですので、先程のウェイン州立大学の例のように、一度模擬授業をすることになれば、その中で、いろんな内輪の意見もいただけるわけですし、ある意味の自信となる基礎のようなものはできるんじゃないかと思います。その中でプロセスを通して、自分がそれこそ安形さんがおっしゃったように、自分の長所ですとか、短所、自分はしゃべるのはあまり苦手だけど、例えばチャットを通して、よく参加はできるだとかを、そのプロセスの中で見つけることができると思います。自信を付けるためにも、実習を組み込んだりしてサポートしたらどうかと思います。ちょっと少し外れるかもしれないんですけど、大学図書館にお勤めの方に知っ

ておいてほしいという知識を私なりに感じたんですけど、結構、今、図書館の方と一緒に作業を長崎でやっているんですけど、高等教育の動向とか、結構、用語とか知らないっていう方が多かったです。また知っていてもそれがどういうものなのか、ひとつちょっとわからないということがありますので、やっぱり、なるべく図書館に勤める以上、高等教育論というものの基礎的な知識というものをつけておいていただいたら、いいなぁと思いました。そうすると、そういうことを、ちょっと一言でも言った後で、学内の先生方にアプローチすると、やっぱりぜんぜん反応が違うわけですね。あと、情報探索法がメインですけど、整理法と表現法、今、ちょっとうちでやっているのがマインドマップというのがあるんですけど、どういうふうに情報を、アイデアを展開していく整理法のひとつとして、それがあったり、あとまた、プレゼンの方法であったり、レポートの書き方もあるんですけど、一応、その情報探索法を担当するにしても、とりあえずどういうものかというのを、やっていただきたいなぁと思いました。さっきも申し上げましたけど、専門領域というものがあったらすごく強いなぁと、やっぱりアメリカでは専門領域を使ってアプローチしていますし、日本でも専門が一緒だと、結構そこで話が弾んでしまいますので、自分が大学図書館に勤める場合は、専門領域、自分は何なんだという、自分はどの専門だと少しできるという領域を認識するとかしていただくということをすごくやっていただけたらと思います。

《コ》ありがとうございました。今、安形先生と長澤先生のお話の中でも、学生に自信をつけさせる。そのためには積極的に取り組みの場を与えるということで、授業とかの中で、実習ですとか演習ですとかの要素を加味して、そこで体験していくことが大事なんじゃないのかと指摘されました。そういうことを取り入れることは、なかなか司書課程の20単位の中の科目では、それぞれ教えることが決まっていてやりづらい側面もありますけど、例えば安形先生のところで図書館特論というものの一部を活用してみるということでも、取り入れるということは一部可能ではないのか。あるいは、児童サービスをやる場合に、ストーリーテリングをやる場合に、人前でやる練習をさせていただきながらしておりますけど、そういういろんな司書課

程の絡みの中で、実際体験させて人前でやってみる、で評価を受けてみるという体験をとらせることができれば、それは自信になったり、積極性の展開に、ほんとに第一歩でしょうけど、なるのではないかと感じました。あと、長澤先生のご指摘、私もその通りだと思ったんですけど、私も役割上大学図書館論という科目を教えなければいけない状況にありまして、そこで、現場を離れますと、どんどん大学図書館を教えることがつらくなる科目でございます。で、私の大学図書館論の中では、高等教育の発展状況と現状とを、かなり、半分から3分の1くらいの時間を割いて話をする。つまり、それぞれの図書館の親機関のミッション、大学図書館でしたら大学の教育がどう展開しているか、学校図書館でしたら学校教育がどう展開しているか、公共図書館だったら地方行政とか地方自治体の動向はどうなっているのか、それぞれの館種の上部機構といいますか上層組織に関する知識を、ふくらみを与えながら、教育をすることは、たぶん、ちょっとだけ高みを見せといて、そのキーワードを与えておいた上での教育をすることに対して必要性ということ、先ほどの長澤先生のコメントではないかと思えます。ですから、そういうことも取り組みの中では入れていくことが必要ですし、可能ではないかと思っております。一昨年から糸賀部会長のもとで、研究集会を4回展開してまいりまして、糸賀先生が2年前におっしゃったものは、一貫性のあるテーマでちゃんとした研究集会をすることが大事だから、第1回目は特にいいテーマ設定になるようにテーマ、上位のテーマを定めましょうということで、私ども、「図書館の教育モデルと業務モデル」というテーマを掲げまして研究集会を展開してまいりました。わずか4回だけの研究集会でしたけれども、それぞれの会に集ってくださった方に何らかのヒントですとか、あるいは発想の転換まではいかなくても、刺激になって、教育の現場で、あるいは図書館の現場で、新たな取り組みをしていただいて、活用していただけたらと思っております。なかなかまともは難しいですが、ここはやっぱり糸賀先生にお願いしたいと思えます。

《糸》糸賀ですけど、今、司会の大場さんがこれまでの研究集会の成果についてまとめていただきました。今日もそうなんですけど、教育部会の部会員で

はなくて、名簿を拝見しますと、せっかく大学図書館の職員の方が大勢いらっしゃいまして、おそらく図書館利用教育に関心をお持ちの方がお集まりなんです。ぜひ、私は、そういう方々にお考えをお聞かせいただきたい、発言していただきたいと思うのです。それは、今回の4人の方々の発表を聞いていて、私は思ったんですが、結局、図書館学、図書館情報学が関わるレベルとしては、大きく三つあって、例えば安形さんが今日発表したのは、司書課程ですかね、現在、短大にせよ、4年制大にせよ、現在の学生を対象にした教育の中で、利用教育を志向したといいますか、多少なりとも、外向的で表現力もあって、いわばコミュニケーション能力を持ったような、学生をどう育てるかということ、それから長澤さんはいわゆるリカレント教育というか、現職者教育で割とフォーマルなものですよね。例えばウエイン州立大学のように、これはALAが認定したライブラリースクールの一つですよ。その一つで正規のカリキュラムとして、そういう授業をうけられた。で、米澤さんの場合には、私、結局そういうのを育てるのは、OJT (on-the-job training) なのかな、つまりそういう教育よりも、どうも米澤さんのいろいろなところから伺えるのは、むしろOJTや、場合によっては、オフザジョブトレーニングというのがあるのかも知れませんが、いわゆる研修の中で、そういうスキルを持った人間を育てていこうと。そういう結果に、結果的にそうなったんだろうと思うんですね。で、そうしますと、今、利用教育に関する大学図書館は、公共図書館の方もいらっしゃいますが、図書館の現場の方々から見て、どこに期待したいのか、教育のどこの部分をどういうふうに変えていったら、いっそうそういうことができるような、それだけのセンスとスキルを持ったような図書館員が育つか、その辺についてのお考えをぜひ、お聞きしたいと、私は思いました。結局、我々、図書館員というものは、社会の中で、大学コミュニティの中で、これは必要だと、特にそこで働く専門職としての図書館員の司書をどうやってこれから生き残らせるか、これだけ、アウトソーシングやいろんな資格を持った人間が外から入ってきて、その時に、ひとつのパワーコンスタントの一つに利用教育なり、情報リテラシー教育なり、そのための突破口を、教育

のプロセスのどこかで変えていきたい。それが司書養成教育のレベルなのか、それともいわゆるリカレント教育、現職者大学院の中で実現していくべきなのか、いやそうじゃなくて、いわゆる研修それもOJTなのかOFFJTなのか、その辺どこを突っついていったら図書館員が育つかを考えていかなければいけない。その場合に、実際に図書館にお勤めの方々は、どういう感触をお持ちなのかをぜひ私は伺いたいと思いますので、ご発言される方がいらっしゃいましたら、お聞きしたいと思います。

《コ》今、糸賀先生からお話がありましたが、フロアからご意見等がありましたら、まだお時間ちょっとありますのでぜひ、お聞きしたい。要は、現役の学生を育てる場面、あるいはすでに図書館等の職場についている者をリカレント教育でフォーマルもしくはインフォーマルで教育していく場面、あるいは現職の職場の中でOJT、OFFJT等研修する場面、この三つを深く考えられるのではないかと。ということでしたけど、どこを強調して、それぞれ置かれている場において当然、若干変わってくると思いますけど、何かご意見等がございませんでしょうか。

《米》先ほど、長澤さんに質問したときに、そういった枠組みがあるなかで、どこでどんな形で図書館員教育とか、どこか一点だけやればいいのかと思えないので、やっぱり現場は現場でやらなくちゃいけない、現場ではできないところは何かしら教育機関で養ってもらいたいというところがあったりとか、あるいは教育機関だったらこういうものがあるということを提供していただいたりとか、そういった様々な情報交換が今、失われている。その意味では、今日は聞けなかったんですが、おそらく皆さん、何かしらお持ちで、図書館で働いて、こういったことをしてもらいたいな、こういうところが足りないなあってあると思うんで、そういった形でフォーマル、インフォーマル、どちらでもいいんですけど、そういった自分たち自身がこうやって必要なものを、現職の立場からして、そういった機会があればいいな、それは自分たちも考えていくことにもなると思います。

《コ》ほかにご意見はございますでしょうか。米澤さんのもとで働いたら私も優秀な大学図書館員になれたかなあと思うのですが、やっぱり職場の中で

も、若い職員の育っていく工夫とか、そこで米澤さんがNIIではそういうことを、仕事の業務を通じて、結構学ぶ、あるいは学ばざるを得なかったとして、やはり、地方の各国立大学のレベルにいきますと、そこまで回らなくて、日々の業務に追われてしまう。でも、それでもご指摘にあったように、ほんとうにそう思ったのは、10年後、15年後を支えるためには、今の若い20代の図書館員ですよ。この人たちに若いときに若干労働負荷がかかっても、いろんな仕事の体験をさせて、それが自信になっていくというステップを踏まえて、意識的に種をまかれていることは、とても重要だと思いますし、まずは、現場、当然わたしたちもいい学生を送り込むことも大事ですけど、現場が踏みとどまって、より発展していくことも大事じゃないのかなと思います。

- 《前》私が今年4月から赴任しました大学の図書館もそうなんですけど、すばらしい上司をどっかの課に飛ばしまして、残った新しいやる気は十分あるんですけど、あまり力が十分とはいえない人たちの2~3人くらいでなんとかやっていかないといけない状態になっており、あとは、派遣の人が来たりだとか、あるいはお手伝いでやっている、そういう状況が増えていると聞いています。それから私が調べましたところによりますと、公共図書館でも十分に研修ができないくらい忙しくて、仕事に追われている。そういう状況でどんなふうにするかいいのかと考えますに、e-learningで情報を送り届けるような、その職場にいてもなんとかできるような、そういった連携をしなきゃいけないんじゃないかなって、個人では思っています。
- 《コ》難しい質問ですけど、部会としての考えは糸賀前部会長とか志保田新部会長にお考えを伺わないと分かりかねますが・・・

## 9 まとめにかえて：より展開したプログラムを目指して

《志保田務》志保田です。e-learningっていうものいろいろなものがありまして、何をe-learningっていうのか、問題なんですけど、私が経験している、何かそういう手段を使った教育というものが2つあるんですが、放送大学ともう一つありまして、ま、放送大学は単にテレビとか放映して、テキストを読んでそれを検索するっていうだけなんです

けど、もう一つの通信教育的なものはそういうふうな課題をよこしまして、それにコメントを出しまして、そこで答えを貰うということをしております。その時に課題図書を全部読んでいるかということに着実に審査いたします。そして読んでいない場合にはこの本を読みなさいということをお願いしてきますので、そういったことは、かえって普通の教育よりも手厚くできる面はありますが、もちろん顔は合わせませんので、そういったことが十分であるかどうか再度確認はできかねる面がありまして、そういったことはまたスクーリングとかでやるべきでしょうけど、それが欠けております。で、そういうふうなことを通して考えられることはやはり、再教育というか、図書館員が新たな、いわば資格をつけていくと、そういったことにつながればいいなと私は思っております。で、そういったことが現在では、例えば、4年制課程がせいぜいありますけど、そういったことをもう少し、高度に設定していきますように、例えばアリゾナ大学でありましたら、やはり通信教育で日本からも学習できますけど、そういった面で必ずしも不可能ではないという状況があります。で、そういったことなかで、今日、感心しましたことはしっかりと目的をもって、この四つの研修をやってこられまして、それは今日に終わることではなく今後も続いていくことだと思いますが、教師がどのような教育をするかということとそして図書館員自身がどのように自己を高め、また自己を発揮していくかということで、その二つが結びつくところに利用教育のポイントがあったような気がします。それがリンクとしてありますので、その点はなお今後とも追究されるべきだと思います。それで私の考え方は、揺れ動く社会の中で、図書館自身の基盤というものが難しい面もあります。つまり、その大学内での図書館に対する対策といいますか、施策が変更されてきている状況があります。例えば、図書館という存在がなくなってしまって、教務課付けになってしまったりだとか、そういうことが起こってきたりしています。こういうことは、ある意味では、止められないといえますか、もちろんそれに対して、何らかの行動を起こすことはありえますけど、教育として考える場合には、それに対応する教育ということをし、さらに図っていく必要があると思います。そうい

うことは図書館員の実力であり、そしてそれを支えて引き出していく教育組織だろうと思っております。何ができるかわかりませんが、探してこられた、そういった面をできるだけ基本的な形の中で、固めていけたらなというふうに思っております。ご助力をお願いしたいと思っております。私個人の経験で申しますと、安形先生がおっしゃったように図書館特論のような時間を私もそこにのっかっている四つの主題、文科省のいっているのはやっておりませんが、利用教育とそれとサーチャーの関係のことをかみ合わせまして、授業を組んで、いろんな人材に来ていただいて、ここにこられている笠井さんにも指導してもらっているんですけど、新しい教育はいくらでも開発できるのではないかと思っておりますし、それから教員を組織して、情報テキストの分析とかそれから教員の図書館利用の報告会をやっております。で、そういったことは若い教員自身が自発的にやっておりまして、教えてほしい、図書館の方法を教えてほしいというようにやってきております。で、図書館員も私は遠慮をしていて、接しなかったんですけど、なぜ今までいってくれなかったのか、先生は図書館学の先生であるのはズルいと、自分たちを活用しないのはおかしいといってきたので、それで私も目から鱗が落ちた思いで、最近ですが遅ればせながらやっているという次第です。ですから、教育というものは、図書館と現場と両方マッチして、一緒になって向上していくということがあります。今日は、皆さんのいろいろな発言を聞きまして、すばらしい企画だと思いました。

《コ》e-learningのテーマでいいますと、教育部会の立場を離れての私見でございますが、やはり現場で、大学図書館もそうですし、公共図書館の場合もなおさらそうなんです、研修に出す時間がそもそもないし、研修に送り込むための旅費ですら捻出できなくなっている事実が確かにございます。そうした場合に、e-learning、たぶん前川先生の発想のe-learningのウェブをベースにした、自己学習ができるような教材化のレベルだと思うんですけど、そのレベルではございませんが、ある意味、その、うまくいってる研修の例としまして、公共図書館の新任図書館長研修は、衛星放送を使って展開しております。あれは、かなり実践に回っております。新任図書館長研修は以前、5回、5

週、5日間、今は確か4回、4日間の研修ですけど、館長さん相手に4日間まるまるその衛星を使いまして、講演といいますか、研修をやるという展開になっております。そのビデオテープは著作権の許諾をとった上で、県立図書館等が録画をやっておりまして、意欲的な県立図書館は全部録画が取れているビデオにつきましては、許諾をとって、地区別の研修会をするようなときにそれを流したり、補足説明をしたりするようなことが行われています。大学図書館の研修はどちらかというと、実はまだ対面型が多いんですけど、皆さんの参加のことを考えますと、対面型の研修にはやっぱり限界があるかなと私は思っております。大学図書館の世界でもそういう、一部のものは練習的な要素が必要で、実際に来なければいけないとか、端末の操作が必要とかいうことがございますけど、いわゆる、トピックを使いたいとか、基本概念を伝えたいということでしたら、それこそ著名人の教員を1時間半拘束して、いいビデオをちゃんと作って流したりすれば、それだけでもかなりレベルが高まっていくんじゃないかなというふうに個人的には思っております。ただ、これは、たぶん前川先生がお考えになられたe-learningのレベルには達していない事柄だと思います。ただ、公共図書館の新任図書館長研修はいまや館長ではなくて、平の係員も実は隠れて見ることが許されてしまいますので、全国いろんな図書館員の方がご覧になっているということがございます。ですから、そういう部分的にはいい講演が、テレビ的な講演だといわれるようになったんだと思うんですね。それをさらにもっと対面的な中距離領域的機能を加えたe-learning、ただそれは長澤先生のほうがお詳しいと思いますけど、e-learningを本気で展開しますと、フォローが大変で人手がいっぱいかかるわけですね。本格的にe-learningを展開するためには、裏方でそれを支える教員といえますか、それを教える側の教員の24時間体制をサポートしなければいけないということもありますので、ここまで確保した上で展開できるかということですけど、そこまでいかない段階ですらいい名講義、東京に行かなきゃ会えない存在になってしまうのではなく、いいお話を全国的に流せるようになってきているということです。

4回にわたりまして、図書館業務モデルと教育

モデルということで、連続の企画としまして、研究集会を開いてまいりました。本日は朝の10時から4時半まで4名の先生方にお集まりいただきまして、貴重な基調講演、事例報告を頂戴いたしました。先生方に拍手でお礼申し上げたいと思います。研究集会のプログラム自体はこちらで終わりになりまして、最後に志保田先生からお言葉を頂戴したいと思います。

《志》さっき長く話しましたので、単にご挨拶だけにしたと思います。休日の合間のようなところをほんとはよくご参加いただきありがとうございます。研究者だけじゃなくて、図書館の立場から特に公共図書館から来ていただいたということは

非常にうれしく存じます。それで、今年の図書館大会が大庭先生の地元の茨城県で開かれますが、皆様も参加していただいて、教育部会にご参加いただきたいと思います。また、研修会も一生懸命考えまして、先ほど、第1回が大切だという風にお話があったんですが、実は今日が第1回なんです。ただし、それは前年度からの決まりで第1回になったんですけど、それを生かせるように第2回から実施していきたいと思いますので、どうぞ協力ご参加のほどよろしくお願ひしたいと思います。今日は、どうもありがとうございました。

## 平成17年度(2005年度) 第1回研究集会

### アンケートに見る集会の成果

アンケート：19名提出（参加=44名 43.2%）

#### 問1 部会員かどうかお聞かせください

- 1) 日本図書館協会・教育部会会員(a) 5名
- 2) 日本図書館協会・教育部会非部会員(b) 6名
- 3) 日本図書館協会非会員(c) 7名
- 4) 未記入 1名

\*以下では「未記入」の1名は集計に含んでいない。

#### 問2 今回の研究集会のテーマの設定は適切でしたか？

- |                | a | b | c |
|----------------|---|---|---|
| 1) 適切であった：18   | 5 | 6 | 7 |
| 2) 適切でなかった：0   |   |   |   |
| 3) どちらともいえない：0 |   |   |   |

#### 問3 今回の研究集会の内容はいかがでしたか？

- |                | a | b | c |
|----------------|---|---|---|
| 1) 適切であった：18   | 5 | 6 | 7 |
| 2) 適切でなかった：0   |   |   |   |
| 3) どちらともいえない：0 |   |   |   |

#### 問4 今回の研究集会に関してご意見・ご指摘等、自由にご記入ください

a 発表者の人選が良く、お話がよかった  
会員他、集まった方々が少なかったことが残念  
司書課程の運営に関して有効なヒントを得られました  
特にありません  
無記入（2）

b 大変勉強になりました  
とても勉強になりました  
出席者の名簿を見て、想像以上に公共図書館の方が  
少なかったことにびっくりしてしまいました。公共の方  
へのアピールが不足していると思いました。  
大学学部図書室に勤務している身として、この2年  
ほど学生サービスの一環として、情報検索の方法を、  
学年初めにオリエンテーションを行なっています。  
(主に1年生のゼミの最初の授業)  
オリエンテーションの内容についてのヒントが得ら  
れればと思い参加しました。大変、参考になりました。  
無記入（2）

c 情報リテラシーサービスの方向性を模索する良い試  
みであったと思います。  
情報リテラシーの対象者や内容が様々でしたが、多  
角的で面白いと思いました。

自館（大学図書館）で、ツールの作成のみに甘んじてしまいそうな傾向にあったので（いけないと思いつつも）、発奮させられました。ありがとうございました。

いろいろな立場の講師の方々の話がきけて大変役に立った。今後も、今回のような大テーマのもとに逐次企画していただけると、あまり詳しくない分野でも理解が深まると思う。

つまるところ、コンピュータ・リテラシーでも、検索ツール紹介、利用方法講習でもない、本当の意味での大学での「情報リテラシー教育」の再定義が必要だと強く感じました。

初めて参加させて頂きまして、右往左往するばかりでしたが、図書館員に今後も必要とされる技量という点からも同時に貴重なお話をうかがうことができました。ありがとうございました。

様々な立場の方からお話を聴くことができ、大変勉強になりました。情報リテラシーのとらえ方が立場により異なることがよく分かりました。ありがとうございました。

**問5** 教育部会の活動全般に関して、ご意見・ご指摘等、自由にご記入ください。

a 図書館情報学を担当している教員のFDをテーマにとりあげていただけるとよいと思っています。改選がおこなわれ、新役員の皆さま、よろしく願います。

厳しい条件の中で、有効な企画を立てていただいていると思います。

特にありません

未記入（2名）

b これからも期待しています。

未記入（5名）

c あまり存じ上げなかったもので、もっと勉強させていただいてから申し上げます

未記入（6名）

---

## 2005年度第2回研究集会のご案内

**と き** 2005年12月17日（土）10:50～16:50  
**と ころ** 大阪市立東淀川勤労者センター  
（地下鉄御堂筋線、JR「新大阪駅」下車東口より東南へ徒歩5分  
阪急京都線 崇禅寺駅下車 北西へ徒歩10分）

**全体テーマ** 「上級司書制度を支えるリカレント教育」  
糸賀 雅児：「上級司書問題」を提議した立場から  
松井 純子：全国規模で実施されている研修企画  
渡邊 勲：公立図書館員が望むリカレント教育  
大倉 孝昭：e-learningの可能性：コンテンツ配信

---

### 【編集後記】

2005年度2号目にあたる第74号をお届けします。次号は全国図書館大会茨城大会の報告を1月下旬にお届けする予定で準備しています。

|   |
|---|
| <b>編集担当</b> 〒631-8585 奈良市学園南3-1-3 帝塚山大学心理福祉学部 柴田 正美<br>Tel. 0742-41-4863 Fax.0742-41-4905 E-mail: mshibata@tezukayama-u.ac.jp |
|---|